

州 藝  
殿 鳥 圖 會

卷之一

雲林院藏





神庫藏版

嚴新圖會

安藝の國伊都波嶋  
此大社一人の世と成て  
此處より天降海へ上  
ハ天降日嗣然ちり下き  
國の内ちりいれ家一  
とちのたはあより後

一



我朝之制可謂時乎一也  
一也其所以爲之也志  
新法之出心志也其  
一也其所以爲之也志  
一也其所以爲之也志  
一也其所以爲之也志  
一也其所以爲之也志

一也其所以爲之也志  
一也其所以爲之也志  
一也其所以爲之也志  
一也其所以爲之也志  
一也其所以爲之也志  
一也其所以爲之也志  
一也其所以爲之也志  
一也其所以爲之也志



あはれ海心いへ石上串  
頼むは姑らあはれ女らあは  
れ世世のいへ糖を女へ  
乃羽子いへ法まへへ  
あはれいへ鳥をいへ久し  
傳へていへ若干姓書をいへ

あはれ一麻呂子頼書  
あはれいへあはれいへ  
えへいへ治策のいへ  
御書あはれいへ  
あはれ土御門のいへ  
あはれいへ道のいへ



久我前内大臣源通明公  
天保し未益春  
慎思齋主人書

謹言

天保し未益春

久我前内大臣源通明公

慎思齋主人書



嚴島面會序

ことふくと六十あまり結らるるちり。花の松也  
しうた山月のこきき海の水の清き原野。  
もつる結とやうた天神のふじのりこた  
社。佛のちのりもふとた寺。いふはこあつた  
こ秋を世のちりゆたあつた。目のこあつた  
足のいもぬいふ。いふはあつた。いふは

いふはあつた。いふはあつた。いふはあつた。  
ぬいふのちりもふ。いふはあつた。いふはあつた。  
天の寛政のちり。玉敷の都結名。いふはあつた。  
あつた。いふはあつた。いふはあつた。いふはあつた。  
いふはあつた。いふはあつた。いふはあつた。いふはあつた。  
いふはあつた。いふはあつた。いふはあつた。いふはあつた。  
いふはあつた。いふはあつた。いふはあつた。いふはあつた。  
いふはあつた。いふはあつた。いふはあつた。いふはあつた。











たきしませしむる久あはれありては。

三保七と書といふと、維新月

田中芳樹

序七

伊都岐島國會序

百たはる頃いつふ志まねよ。志のまのい海に  
かゝる。三たゝるは大神いも。いたまくと  
元よかゝる。天津神祖の侍子達りし。あ。  
大神名を石上古より代この國籍りも。いち  
ち。あ。く。侍。徳。を。久。方。の。天。の。照。る。と。祿。さ。る。え。よ  
さ。か。え。海。して。不。か。さ。る。天。下。も。あ。る。玉。運。二。さ。  
なる。記。名。不。な。ん。あ。る。か。る。め。を。た。き。大。宮。宗。なる。



昔の歌。うつぎと此の世といふるもの。これ詩ウタ  
 なるを書フミ。ふもあつたきい。いづれや口をい。  
 おまひつるまも。おのれ清。その國內クニノミより神徳ミコトノチカラ  
 加クニありし。帝ミコ恩オンのたまはし。まも同く。まもささの國人クニノヒト也。  
 此大神の祿クシぞごもあるもの。世のなりのいひよ。あご  
 はらひて。元まうどぬ。それらが。おまひやりよ。も  
 ちの祿クシも。あは年此おまひおらして。此らま  
 はららよまも。しつる書フミ。世もあをまわ。ま

古今イミヘイ古書コノミのわがが。まも宮人ミヤヒトのまもひを向りて。  
 先ムカむ祿クシと大神の縁故ユヅリより。下巻ハレ春秋アキ也  
 御オン祭マツリ祀コトノモトの根元ネノモトか。まも島内シマノありまもあらまも  
 らまもまも。まも源ヒあらまも巻マキを。まもいづれ。  
 源フチ始ホも。まもまもあつあぬれも。まもわが梨ナシ  
 もらせ。まもまもあつあつり。田中タナカ若ニギハヤヒ木の  
 うまもわが。まもまも。菅スガの根ネの祿クシも。まもまも  
 源フチ中ナカのまも。まも源フチ中ナカのまも。



なる地をすりよ。いづれ地書なるものなり。  
 千里の外四方の境よ。ゆふいづりて人と人の  
 よそみえ。あは大神の大神をゆめをたすむ。  
 空つかりあかきん張ちをとも。なりあんかし。  
 天保いよせといふ年十月 星田清

凡例

嚴島（ついで）の最雨（さいう）なる小島（こしま）なりといへども本社（ほんしや）の壯麗（さうらい）より始免（しやうめん）  
 名區佳境（めいくわいけい）の松（まつ）石（いし）山水（さんすい）風光（ふうかう）の優（ゆう）なる他（た）小比類（こひるい）をべき處（ところ）  
 をさくあることな一故（ゆゑ）今（いま）この書（しよ）成編（せいはん）にて凡島（ばんしよ）の内（うち）後（あと）  
 ること鎖細（ささい）も漏（もら）さ次真景（しけんけい）を写（うつ）して番（ばん）を設（まう）け實録（じつろく）を  
 考（かんが）へて事（こと）を記（し）し看官（くわん）をして眼前（がんぜん）小瞭然（せうぜん）もさくむ  
 草創（そうそう）より以来（このころ）有餘年（せんよねん）の鳥兔（うと）を徑（へ）て時世（ときせい）の盛衰（せいそふ）小志（せうし）  
 米（こめ）がひ或（ある）祝融（しゆりゆう）の災（わざ）荒蕪（くわぶ）或（ある）兵亂（へいらん）の害（がい）移變（いへん）せる  
 もの多（おほ）し然（しか）まどもさ次（し）が小海（せうかい）中（ちゆう）小屹立（せうてつりつ）として陸地（りくち）を海（うみ）より  
 隔（へだ）たり米（こめ）れを松（まつ）のづゝ災害（さいがい）成（なり）遁（のが）して松（まつ）革（くわ）を知（し）るるも  
 のもそこな妃（み）ありは番（ばん）を按（あん）して既（すで）ぶべし  
 番中間（ばんちゆうかん）人物（じんぶつ）の大番（たいばん）を出（い）せるが中（ちゆう）小怪談（くわいだん）奇話（きわ）をた



よしもあまの祢どきな古書小徴しきれば安んといふべし次  
巻あま大經堂の櫛樟の故子の如き疑しな似たまども  
里老の口碑既久しいうごう強ち小捨べき故に載せし見  
童の欠伸を慰む

島外といへども地味前速田社大頭社官幣社誓願寺  
田所氏などのごとな由緒あるかまりの悉く載たり

畫圖いみな姓名印章を載てその人をあらはせり姓名  
印章なれたる峻峯齋守嗣の筆のとなり

島内諸社の祭祀及禱祀の故事などをバ巻五小年中  
行ふと顯し別小拳たり地味前以下島外の例祭の

一社々の部下小記より  
又倉小藏の宝物の別小圖して五冊なる後篇

とせり

嚮小道芝記の作ありといへども畫圖少なれたるゆゑ小実  
地を履さる人れき免小眼を悦ばむる小至るは渉獵た  
るはるがゆるな事跡を索る人の為小益あることなし

こはよより此度の拳ハ日本紀古事記等の古書に  
更ふもいも次野史牌官のいさまで勉免を攝となる  
ことハ本文をその後載を聊かも私意の添削を加  
へざるものなり

この書編集のち、米より故實の正誤をたゞし是非の添削  
をくまへつるものハ本藩の頼惟柔加藤景續周防の田中芳樹  
なり



一區據孤洲之巖  
薛四面臨巨海之  
渺茫

嚴島圖會卷之壹

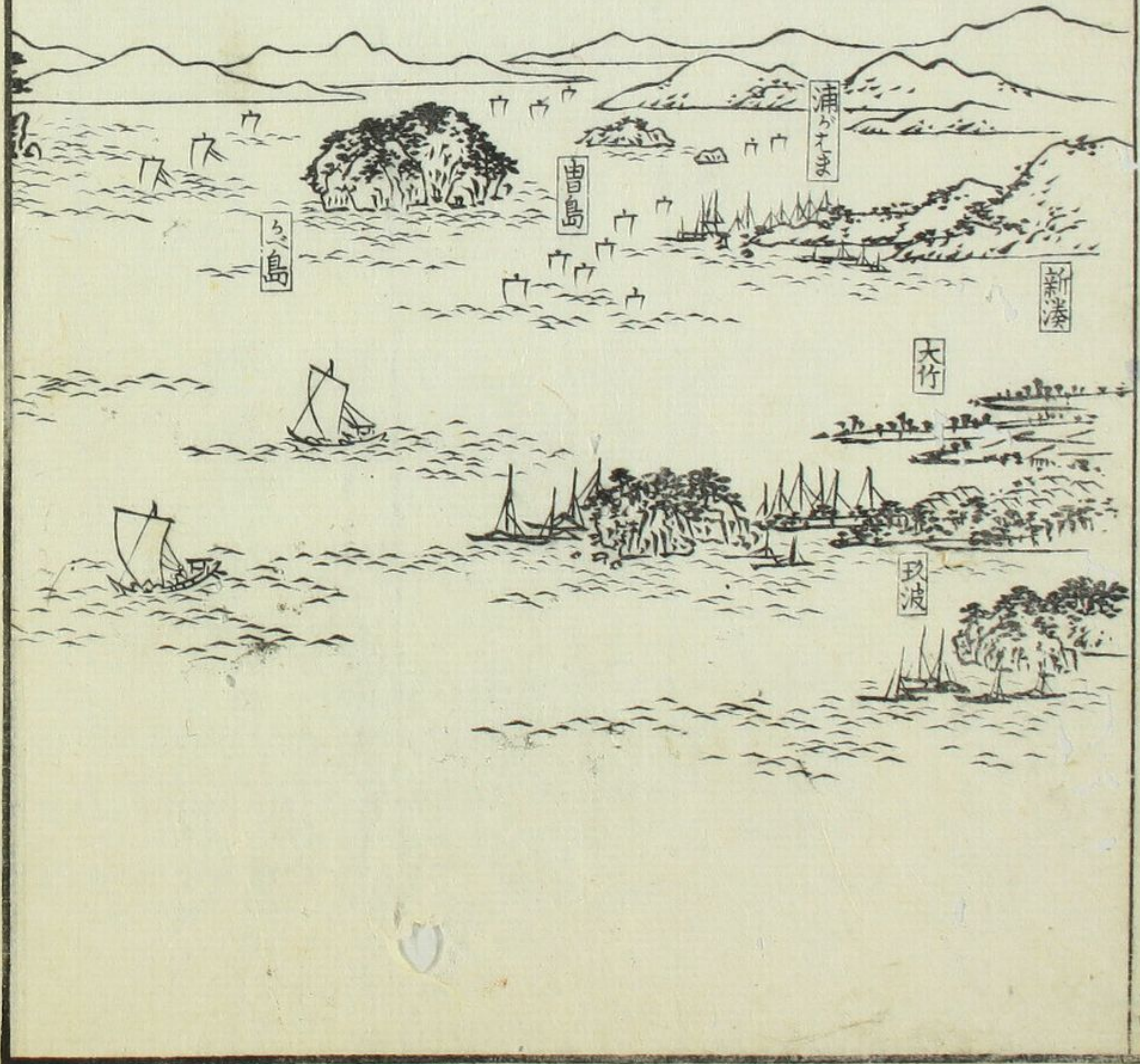
目錄

- 本社ねんや 寶殿たからどの 幣殿へいでん 三棟拜殿みつむねのまげ
- 客神社まろうじ 寶殿たからどの 幣殿へいでん 三棟拜殿みつむねのまげ
- 高舞臺たかぶたい 平舞臺ひらぶたい 樂屋がくや 神階かみかた 神領かみりやう
- 廊たさた 大黒堂たいこくどう 天滿宮てんまんぐう 廻廊くわいりやう 門客神社かむかきのかみ
- 圓橋まるはし 平橋ひらはし 瑞籬みづがき 御供所ごこうじよ 文庫ぶんこ
- 湯立殿ゆだちどの 能舞臺のぶたい 鐘樓かねぐら 社頭修理じやとうしゆり 攝社末社せつしやまつしや
- 大鳥居おほとりゐ 同額どうがく 繪馬えうま 社家供僧内侍社役人職名じやけくそうないしやくじんしやくな



いづくませんつ枝もて  
**巖島全圖表下**

安菴のくま人未田  
 芦麿がもとよりかの  
 園のいつくまの苗  
 のいとほしくつたこ  
 るをたぐうらちをこて  
 幸居宜長  
 免のふまえ故  
 ろちていつたま  
 いつまぬんと  
 たぐるうし繪

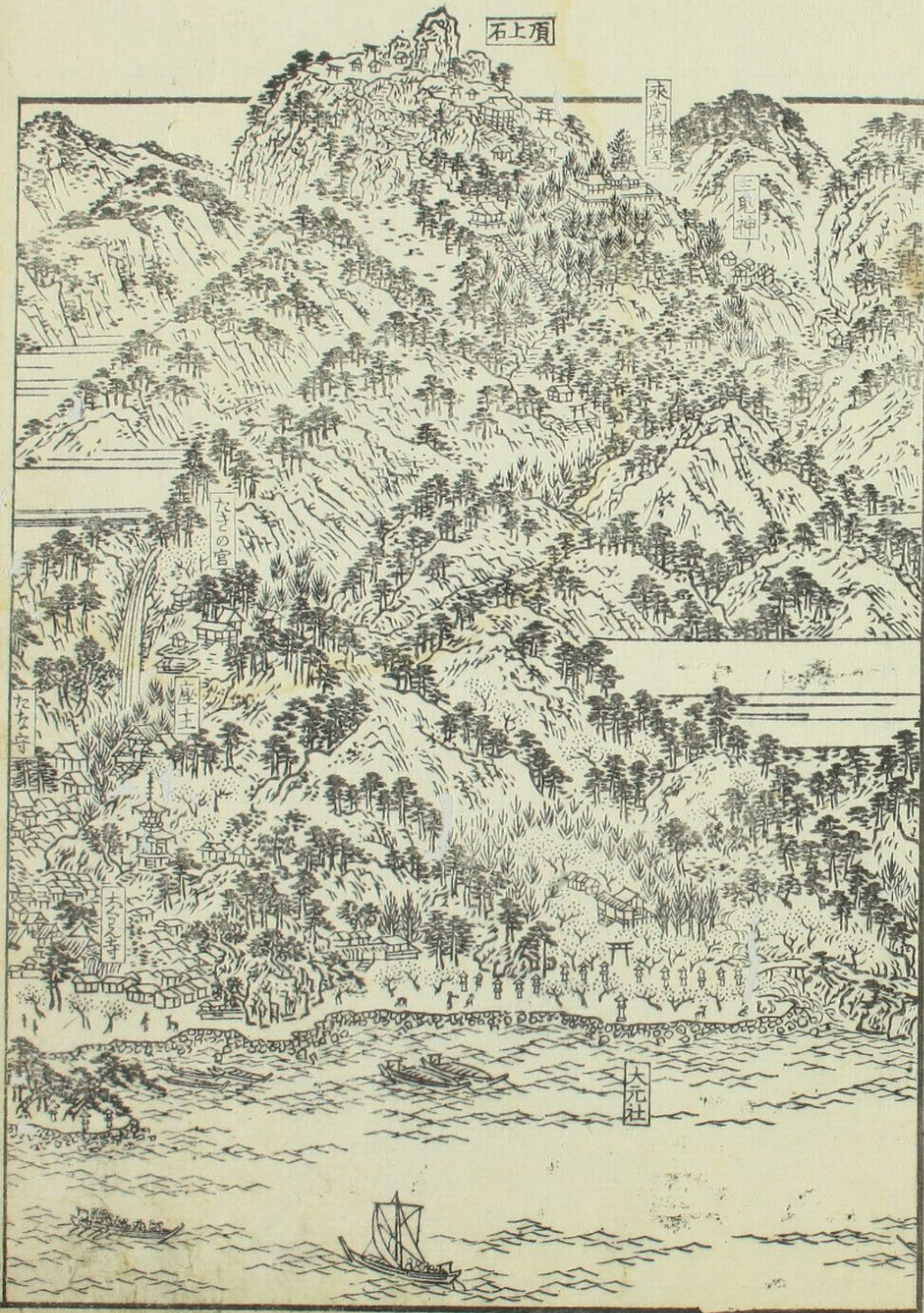


彩舟銜尾倚汀沙  
 隱映仙山五色霞  
 壩内潮回廊九曲  
 街頭鹿狎市千家  
 諸平威鬱悲黄土  
 二帝宸遊想翠華  
 懷古何人同此意  
 四隣歌吹徹霄譁

茶山







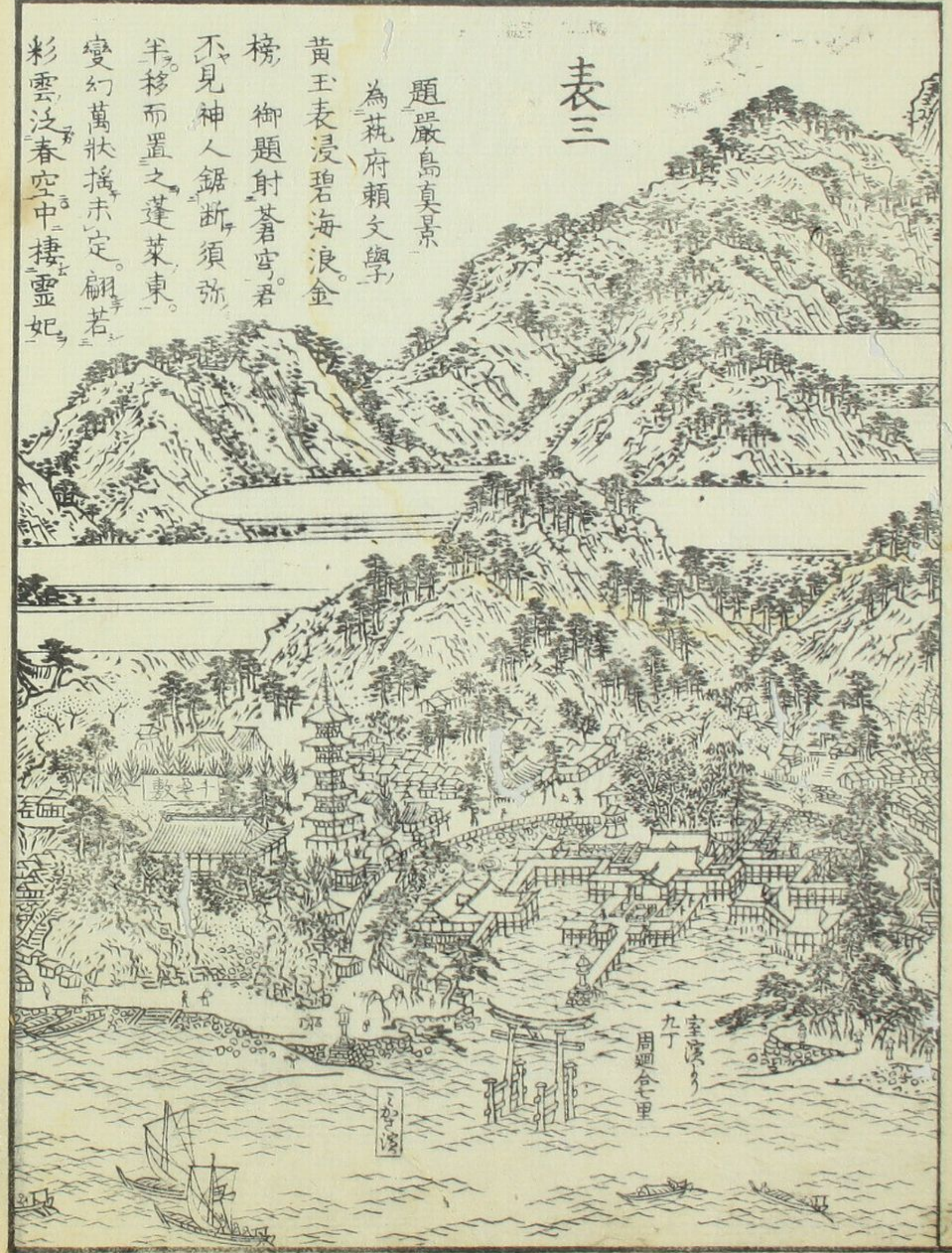


表三

題嚴島真景

為菟府賴文學

黃玉表浸碧海。金榜。御題射。蒼宮。君不見。神人。鋸斷。須弥。半。移。而。置之。蓬萊。東。變幻。萬狀。搖未定。翻若。彩雲。泛春空。中。棲靈妃。



市杵姬。紫貝之關。水晶宮。君臣。遭遇。其所。掌。香花。奔顛。

傾萬衆。余亦。乘。夢。掌。一到。珊瑚。寶。鞭策。白龍。僊鹿。神鴉。相後。先。延。余。飛。度。百尺。虹。響。霹靂。廊。驚。迷。初。覺。百。八。珠。燈。波。底。紅。寅。夜。始。達。瑤。階。下。仰。歎。大。閻。問。控。々。凶。逆。不。臣。平。相。國。義。弘。元。就。底。蟻。螻。不。知。神。明。何。所。眷。福。祐。擁。護。如。許。隆。余。有。神。策。萬。餘。言。一。言。而。可。以。興。邦。東。說。西。說。古。已。爛。君。相。不。省。衰。如。龍。衰。朽。寒。餓。非。所。顧。報。國。思。効。消。埃。忠。聰。明。正。直。如。不。味。回。首。一。為。照。丹。衷。銀。纏。長。刀。今。安。在。何。惜。暫。時。借。禿。翁。哀。歡。十。聲。寂。不。答。恍。然。骨。慄。朦。朧。中。賴。家。真。面。誰。處。得。一。々。與。夢。所。見。同。對。之。猶。疑。魂。未。返。如。聞。空。樂。良。曉。風。

柴邦彦







表四

神山縹渺小蓬萊  
 七浦風烟與海開  
 今古精禪無廢馳  
 闕宮時進紫霞杯

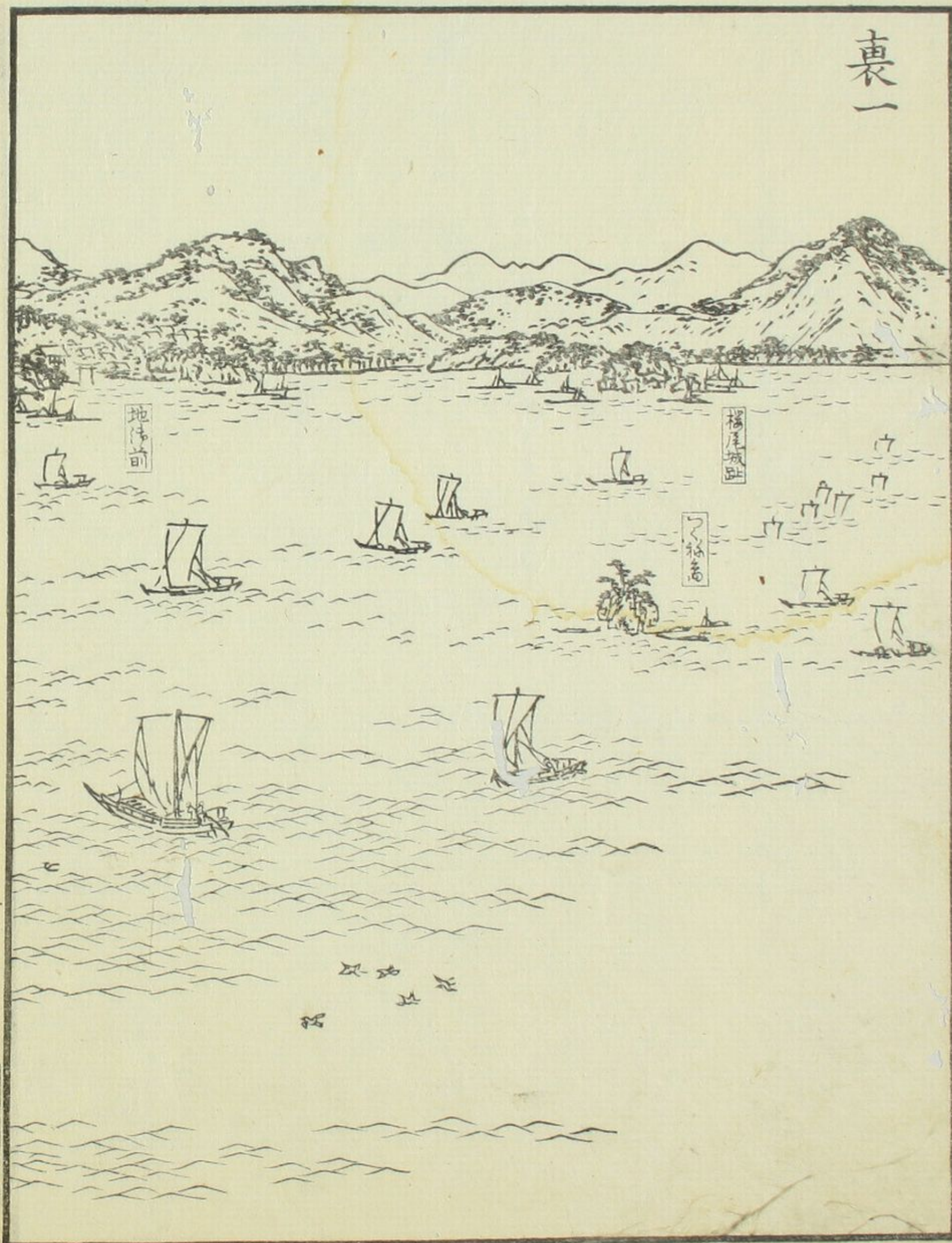
寺田臨川



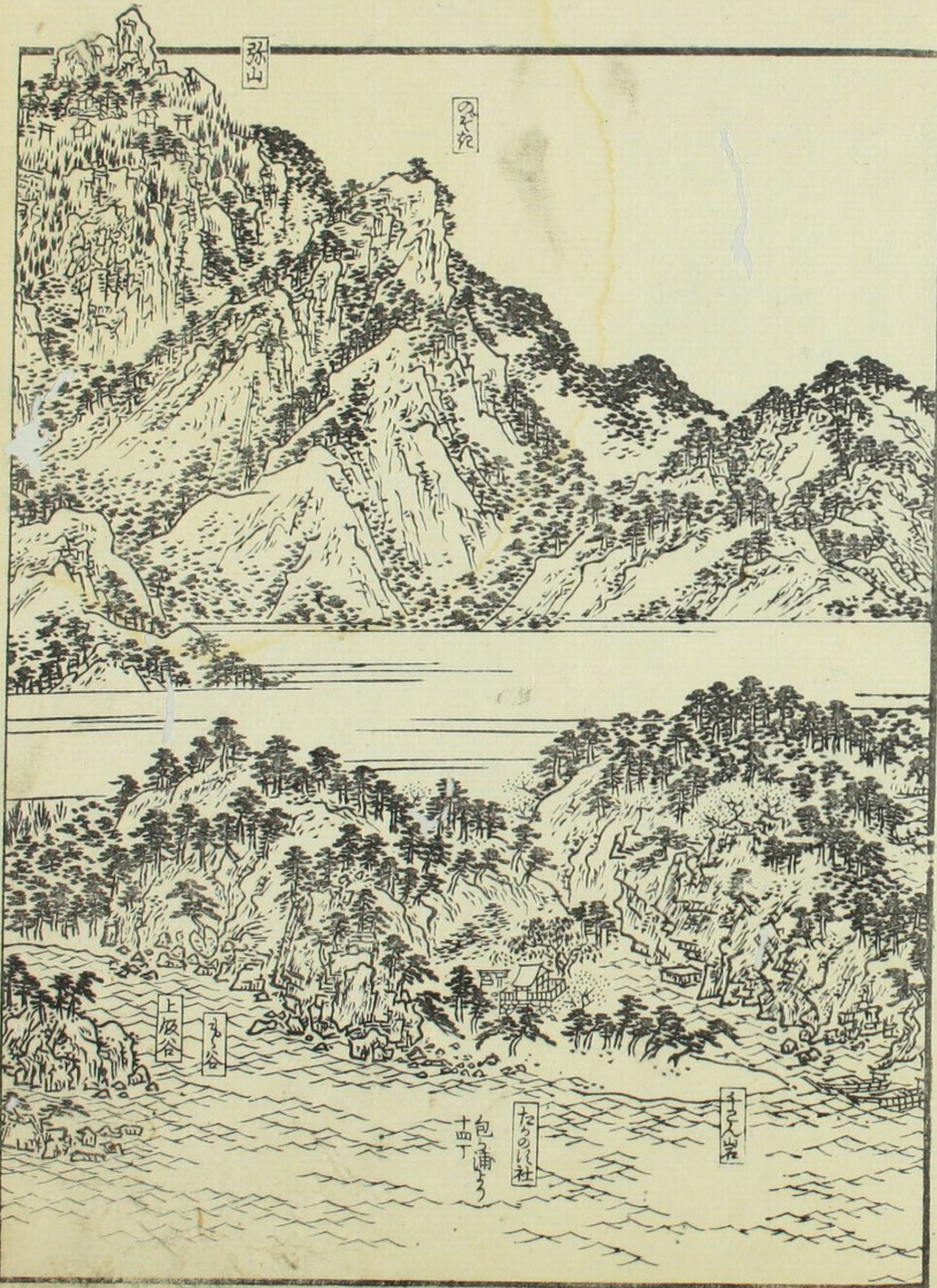




裏一

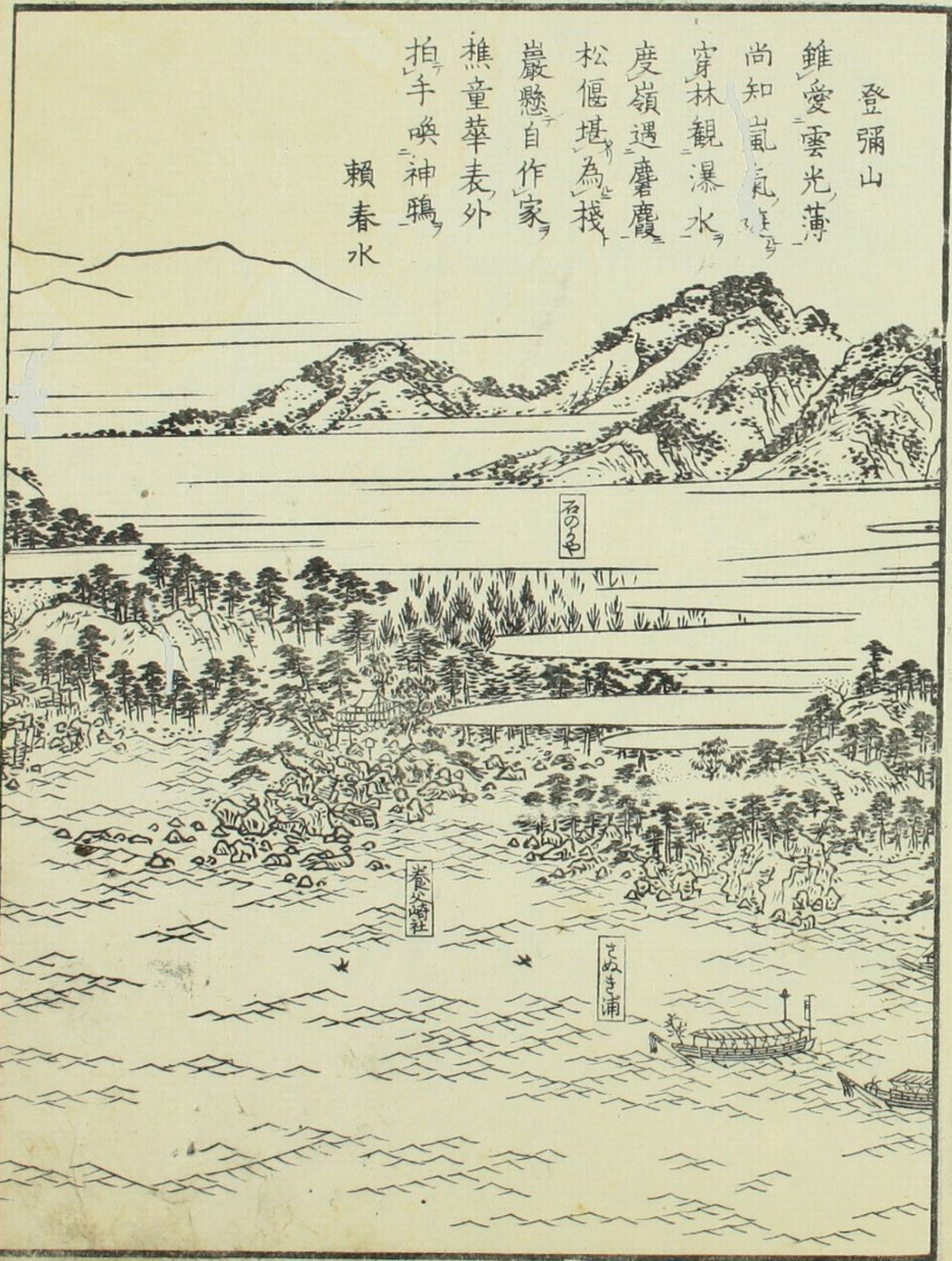




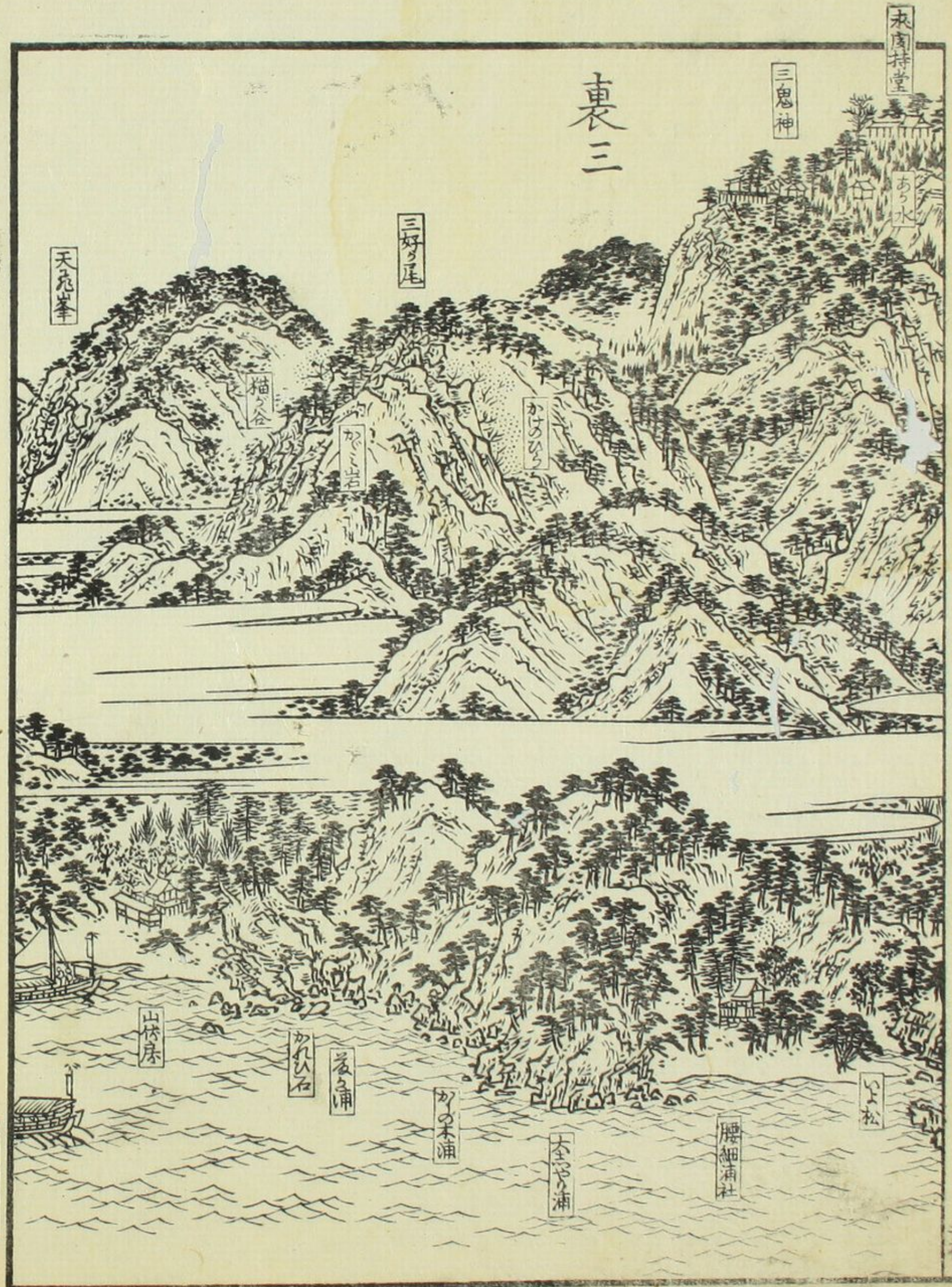




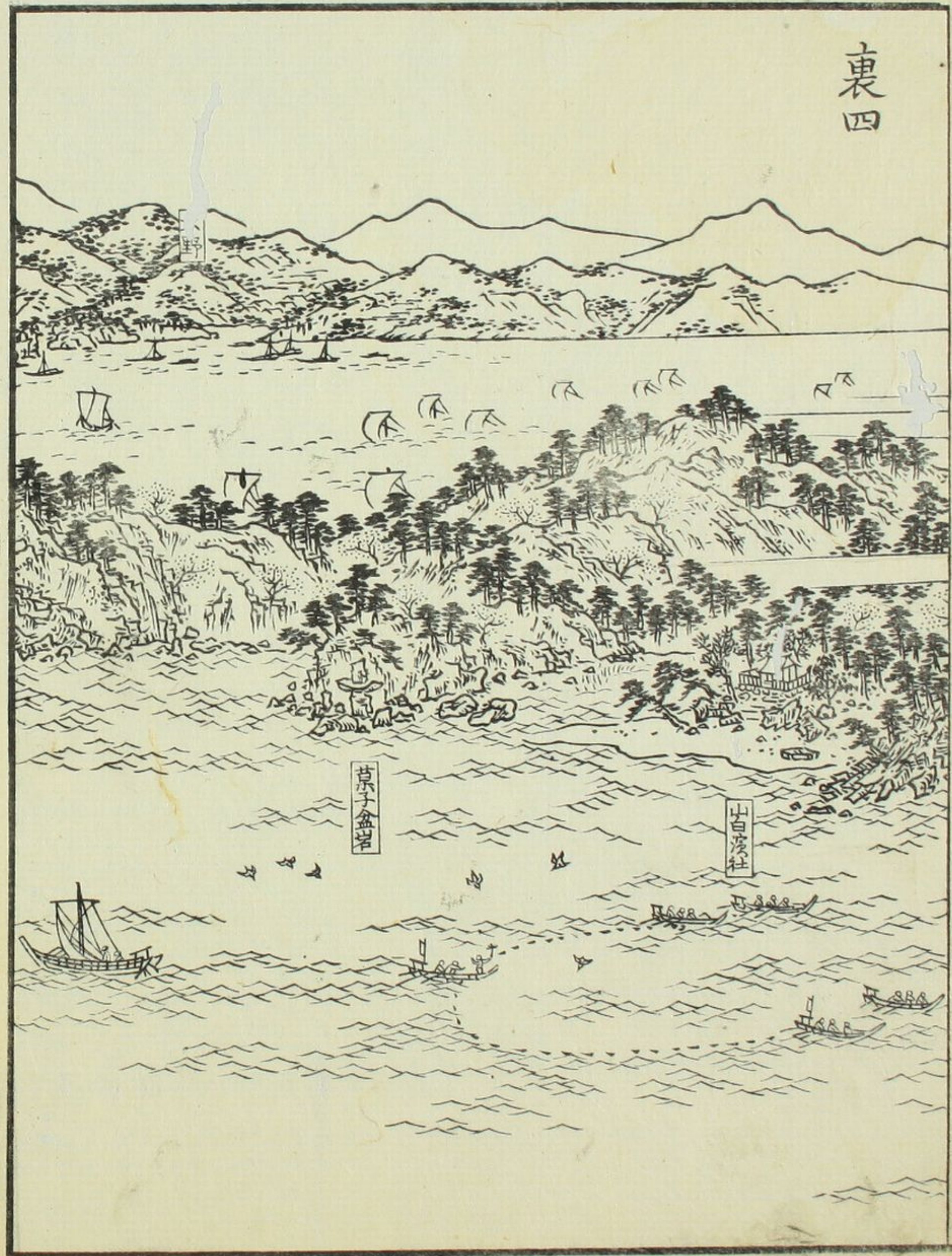
登彌山  
 雖愛雲光薄  
 尚知嵐氣佳  
 穿林觀瀑水  
 度嶺遇磨麿  
 松偃堪為棧  
 巖懸自作家  
 樵童華表外  
 拍手喚神鴉  
 賴春水



裏三









嚴島圖會卷之壹

嚴島ハ安藝の國西海中ニあり府城廣島ヲ去ること五里佐伯郡小  
属せり島周廻七里西北を面と一東南に背と次遠くハ伊豫周防  
乃地を望みちろく多佐伯郡の地方小對せり旧島号ハ恩賀島ま  
た御番島あるハ霧島我島など稱へりといふ説阿基どはごらなる  
れもふよこの島もといさせる名もなかり一に清神の鎮座一澄楚の神  
号の市杵とかよはし一頭て伊都岐島といハ稱たるなる人類聚國史延  
喜式三代實録山摠記拾芥抄等の諸書ニハ伊都岐島といハ後世  
専ら嚴島と稱へたり是もまたその音のかよへるゆゑなり  
の島北山をみ磯のさよいつこ一と作ありけるより  
又つこ一と号せりとせ云くと見ゆる  
また宮島といへるも其唱既久  
一く一高倉帝御幸記及び珠域の書登壇必究圖書編等亦も  
みな宮島とかけり島のうちに七浦八景の稱ありて日本三名區の其一なり

按ふ小上件ハ恩賀島また御番島我島霧島などの説更ハ正史小見  
る起なり但道芝記ハ二首の歌引て入海の八十浦をけて十島なる中  
香の島ハ七浦恩賀一また我が島をわづらよとわが島はとらり  
つりり余云一第一そ城小野篁の歌と一ニを在原業平と次これ二歌亦よ  
りてたんがの島といふよ一記せりはまど香深き島とある故以て御香の  
島といひ恩賀の字たがひなれと訓なるなぞ其義知ご一まご我島  
の説ハ神詠とて傳ふる哥亦一つとこれわさ所こせうたごまごこハ  
島ぞこれハながいは云これ義亦據まらなり然る小この歌安藝國名取  
て歌枕名寄亦出て我島汝島の二島ハ佐伯郡能美島海上小つくと  
是とこれ島亦つとさべ一はてハ神詠と習んと中ハ小杜撰といふ笑一霧  
島といつと何の證とな一  
懷中抄  
あごなるん人小見せ一つ一ま岐のぬき衣させん物うは



劔王御誓 けんぎやくわんぎやく



田中芳松

久うぬれまたあ井

乃ちのそこたう

半はとつたの

たう

まううはあ



画院生 尤虫藤可為筆

画院生

二神安河のちうれ  
を隔てむうひ立勢  
たまふこと女女のど  
一物にその番を  
かばうてた雲奴  
のまかりさハこの片誓  
天上小てのみちさふ  
一を児音小頼く知  
一先んとてなり



本社 安藝國第一宮 嚴島大明神

○延喜神名式曰安藝國佐伯郡伊都岐島神社延喜神名式

○諸社根源抄曰安藝國佐伯郡伊都岐島社名神大市杵島姬田心姫湍津姬以上三座

○大日本一宮記曰安藝國佐伯郡伊都岐島神社

○正殿三座

市杵島姬命

田心姫命

湍津姬命

○合殿三座

國常立尊

天照皇太神

素盞鳴命

○客神社五座

正哉吾勝々速日天忍穗耳命

天穗日命

天津彦根命

活津彦根命

熊野櫛樟日命

○古事記曰於是洗左御目時取成神名天照大御神次洗右御目時取成神名月讀命次洗御鼻時取成神名建速須佐之男命此時伊邪那伎命大歡喜詔吾者生々而於生終得三貴子即其御頸珠之王緒母由良通取由良迦志而賜天照大御神而詔之汝命者所知高天原矣事依而賜也故其御頸珠名謂御倉板舉之神次詔月讀命汝命者所知夜之食國矣事依也次詔建速須佐之男命汝命者所知海原矣事依也故各隨依賜之命所知者之中速須佐之男命不知所命之國而八拳須至于心前啼伊佐知伎也其泣扶者青山如枯山泣枯河海者悉泣乾是以惡神之音如狹蠅皆滿萬物之妖悉發故伊邪那伎大御神詔速須佐之男命何由以汝不治所事依之國而哭伊佐知流爾答白僕者欲罷妣國根之堅洲國故哭爾伊邪那伎大御神大忿怒詔然者汝不可住此國乃神夜良比爾夜



良比賜也 中畧 故於是速須佐之男命言然者請天照大御神將罷  
乃奉上天時山川悉動國土皆震雨天照大御神聞驚而詔我那勢  
命之上來由者必不善心欲奪我國耳即解御髮纏御美豆羅而乃  
於左右御美豆羅亦於御髮亦於左右御手各纏持八尺勾璫之五  
百津之美須麻流之珠而曾毘良通者負千入之鞞附五百入之鞞  
亦所取佩伊都之竹鞞而弓腰振立而堅庭者向股蹈那豆美如沫  
雪散而伊都之男建踏建而待問何故上來爾速須佐之男命答曰  
僕者無邪心唯大御神之命以問賜僕之哭伊佐知流之事故白都  
良久僕者往妣國以哭爾大御神詔汝者不可在此國而神夜良比  
夜良比賜故以為詰將罷往之狀參上耳無異心爾天照大御神詔  
然者汝心之清明何以知於是速須佐之男命答曰各宇氣比而生  
子故爾各中置天安河而宇氣布時天照大御神先乞度建速須佐

之男命所佩十津加劔打折三段而奴那登母々由良爾振滌天之眞  
名井而佐賀美爾迦美而吹棄氣吹之狹霧所成神御名多紀理毘  
賣命亦御名謂奧津島比賣命次市杵島比賣命亦御名謂狹依毘  
賣命次多岐都比賣命速須佐之男命乞度天照大御神所纏左御  
美豆良八尺勾璫之五百津之美須麻流珠而奴那登母由良爾  
振滌天之眞名井而佐賀美通迦美而於吹棄氣吹之狹霧所成神  
御名正勝吾勝々速日天之忍穗耳命亦乞度所纏右御美豆良之  
珠而佐賀美通迦美而於吹棄氣吹之狹霧所成神御名天之菩卑  
能命亦乞度所纏御髮之珠而佐賀美通迦美而於吹棄氣吹之狹  
霧所成神御名天津日子根命又乞度所纏左御手之珠而佐賀美  
通迦美而於吹棄氣吹之狹霧所成神御名活津日子根命亦乞度  
所纏右御手之珠而佐賀美通迦美而於吹棄氣吹之狹霧所成神



御名熊野久須毘命拜五柱

日本書紀小巻以日神所生三女神者使降居葦原中國之宇佐島矣今在海北道中號曰道主貴此筑紫水沼君等祭神是也云云  
又また舊事紀よハ三女神降居筑紫國宇佐島在海北道中といハる筑紫の宇佐島小津鎮座のこと成記せるなりけるを在海北道中といハる成もてこの高社といハるにあつるハ謬也

神階 三代實錄曰貞觀元年己卯春正月二十七日奉授安

菟國正五位下伊都岐島神從四位下同九年丁亥冬十月十三

日戊寅勅授安菟國從四位下伊都岐島神從四位上云々のち

つひ小正一位よ次みたまへりそもく神位階を奉らるることハ

もと尊卑をよかつた末よ次みたまへり今義解深田耕等に神位の高下

成もて神領の多寡決定らるること見えまた小畠准后の造殿儀式よ

身神の品位をよて封域決定むること有りて正三位以上四至九町  
從四位以上四至八町從五位以上四至限四町と見えたり三代  
實錄小巻仁壽元年正月庚子詔天下諸神不論有位無位叙正  
六位上と母見申

○神領

按小聖德太子傳小推古帝の綸旨成載せらる當社神領ハ

當國中水田一千百八十町修理八十余町と有り是明神廟祭の時の寄

附と見ゆきど外小證なり神庫小務めらる古文書小仁平四年小院應

并國司廳宣成以て當國高田郡三田一御成神領小定らるまた仁安元年の

立券書小ハ一官御領志道原合一町六反二百四十歩と有りまた嘉

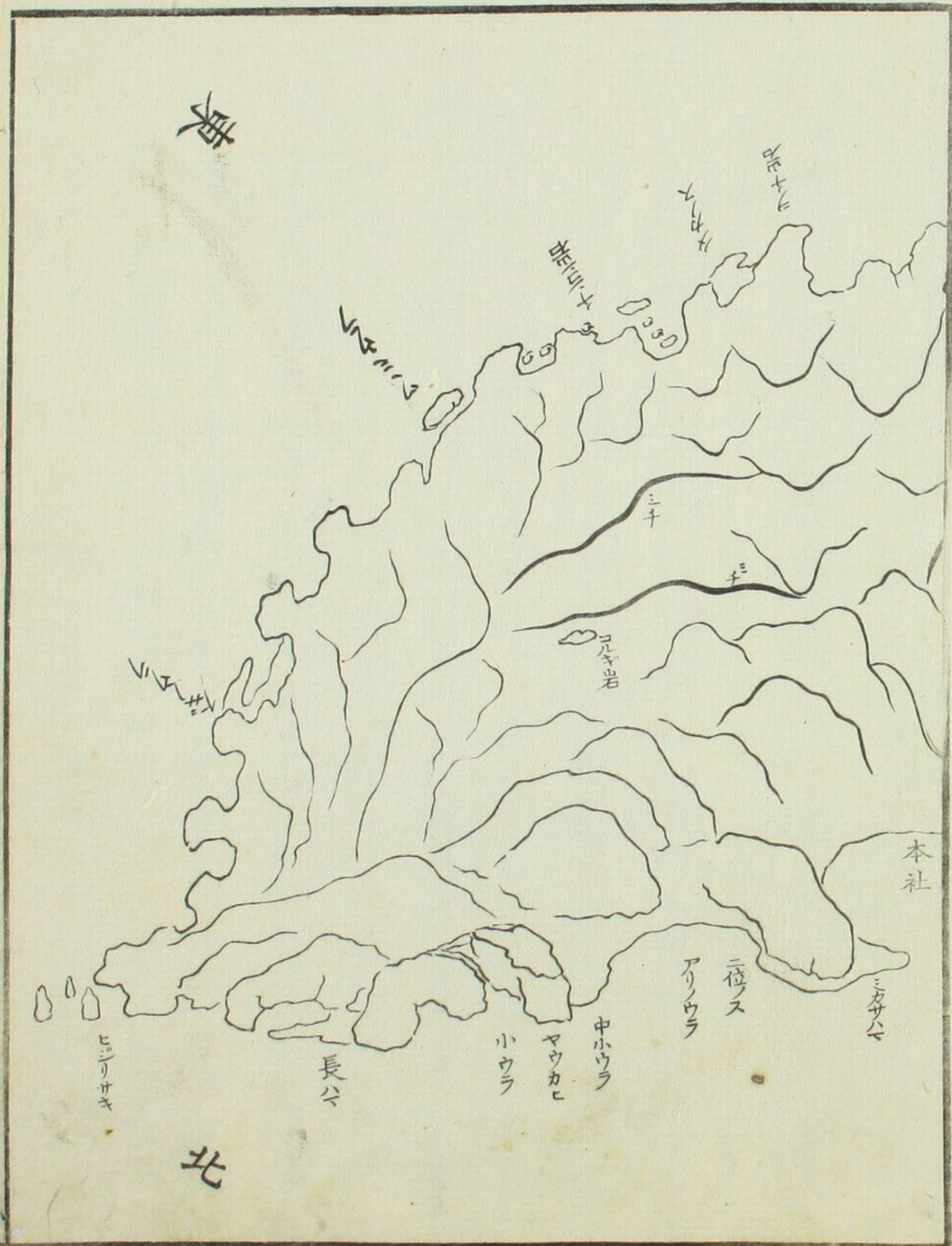
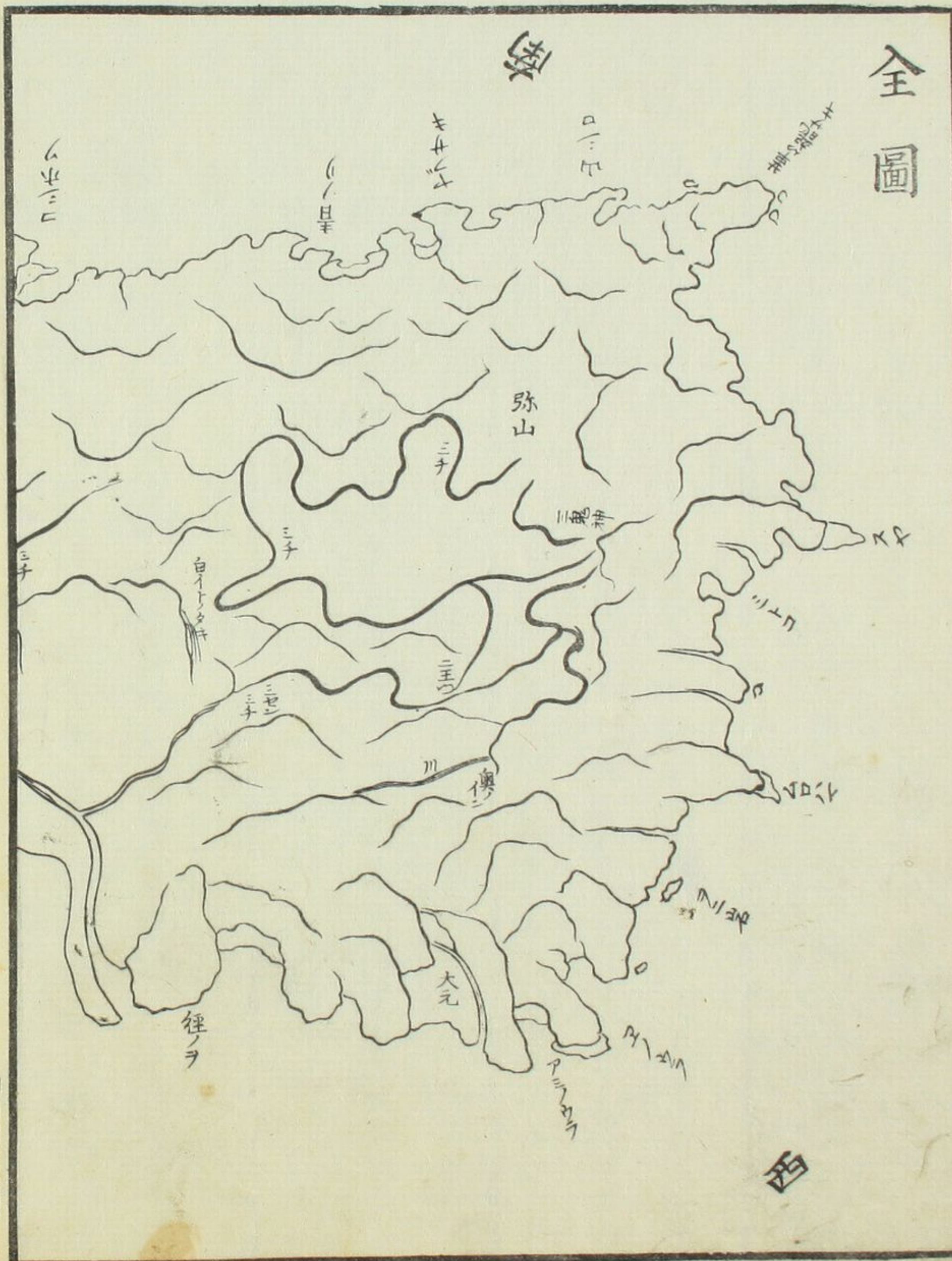
應三年乃文書小公家方并建春門院御祈禱料伊都岐島御領壬生庄

田七十六町畠十一町と有りまた安元二年春木市折二村御供田同二年高

田郷七箇郷を附せし治承元年小清盛より安麻庄成寄進有り正



全圖





治元年よと朔幣殿中御供田新御供田と定らる文曆年間周防前  
司親實當國の守護となり神職なり神領支配をまゝ東鑑小兼  
久巳年正月十八日安藝國子與末地頭令寄進嚴島神領去正應六年  
蒙古來寇のと死降伏の祈禱ありて鎌倉より因幡國船岡郷半介寄進  
あり此ちゆ足利尊氏大内義隆より母一ばく寄附りまた房頭記小  
小方久波黒河大野山郷の口々を大内義隆より寄附乃こと及元を  
り其後毛利家此時ハ五千石なり一が福島正則入封のし死諸寺諸  
社の領園刈りしゆ急當社領と大内減少せ理  
伊都岐島の大伊神と称し奉るハ掛巻と恐支市持島姫命湍津姫  
命田心姫命以上三女の神小まりて共小天照大御神の生ま勢ると  
こゆなり伊邪那岐命伊邪那美命天下の君たるべきと勢をうまんや  
て生しよ勢る伊邪天照大伊神と申し奉る次小月讀命次小建

須佐之男命と稱し奉れり於是天照大伊神ハ高天原所知先一月  
讀命ハ青海原所知を故各依りたまふまゝ一所知を中須佐之  
男命ハ其性勇悍くして青山於枯山となり人民を害ひたまひ一は  
伊邪那岐命いたく忿怒して極えて遠き國小神逐小やらひたまふ  
幣是小よりて須佐之男命根國小至りたまはんと勢にまつ天照大伊  
神小其由以告て後小は替罷りなめとて高天原小泰上りたまひ一は海山  
鳴動あゆり天照大伊神こま聞言して大内驚りたまひ是らなる次須  
佐之男命の何れ死より起るなるべしと事御身小勇夫の猛き備を設  
け嚴男建踏建て待たまへ是ハ須佐之男命これ死見まて僕ハは異  
心なり此度父命小逐き一によりて告白て後まからんた免泰来つり  
こぞ何事とゆまひは天照大伊神聞言はとらば其清きん何  
としてはたけたまはんと詔ひき於是須佐之男命はこまハ我阿



姉と母の誓言にて御生子と侍らんをけりまひて各天安河以隔て誓ひ  
れまふ時小先天照大神須佐之男命の佩したまふる十握の劔を乞度  
りうち折て三鍔小な一天の真名井小振滌き蹴然小かきて吹棄る袂霧の  
中小生一ま努る法子田心姫命市杵島姫命湍津姫命小まは既に  
く須佐之男命天照大神のとちたまふる八坂瓊乃五百箇法統の  
玉瓊ひとり天比真名井小ありて死はごにいかして吹棄るはごり此  
中小な一ま努る御子正哉吾勝々速日天忍穗耳命天穗日命天津日子  
根命活津彦根命熊野櫛樟日命以上五男の神小てまゝりく架か法  
小當島法鎮座のこと正史小載せしこと外く終りに社家の傳ふる所昔  
三神此地小天降ま一此島法在在亦小定むゆきよ一當郡の住人佐  
伯鞞職と云者小法訛言な一給ゆり鞞職かこく母官奏法經これバ  
御寶殿法造立一神領許多法附たまひりこれ推古天皇端正五年

癸丑十一月十二日なりといふ

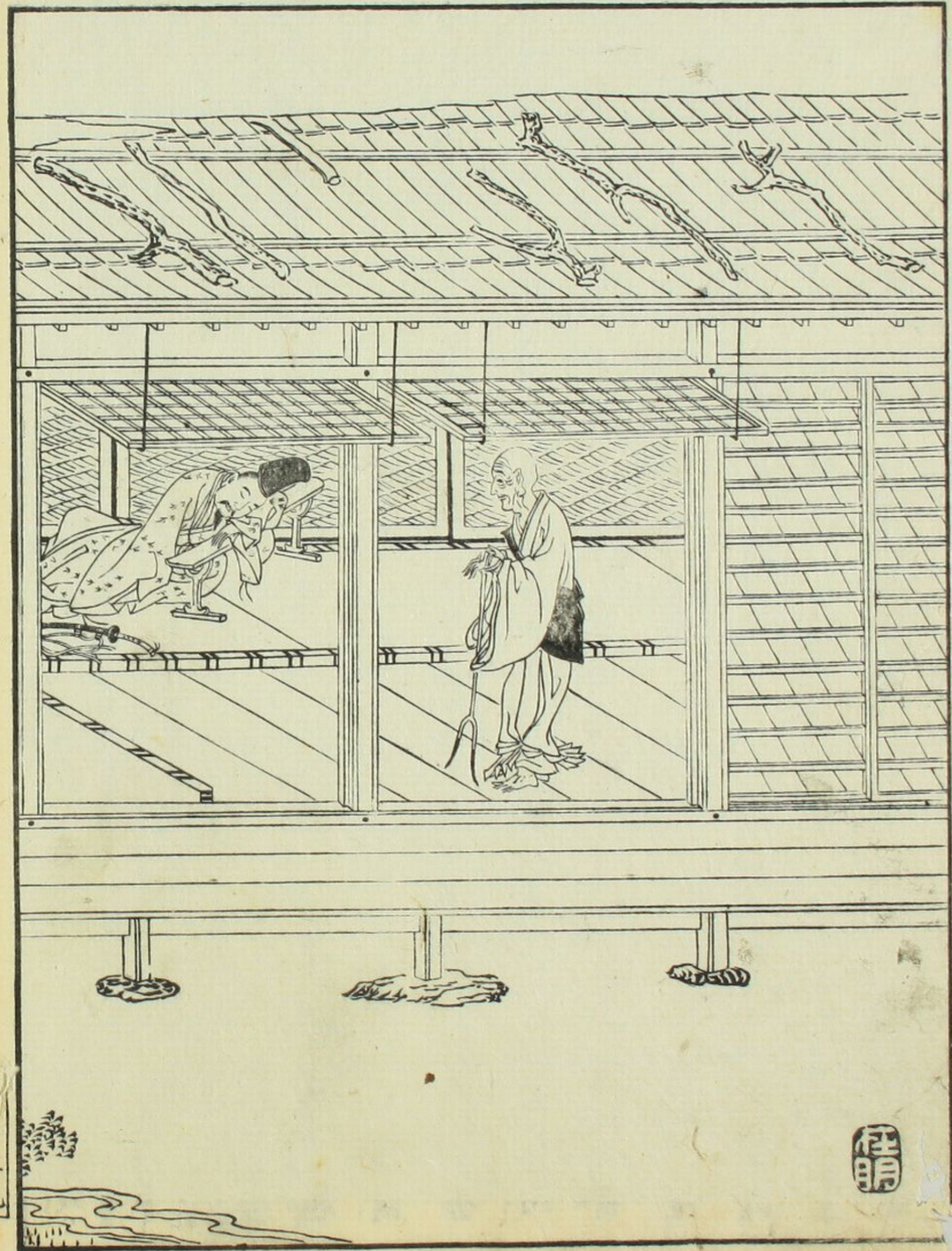
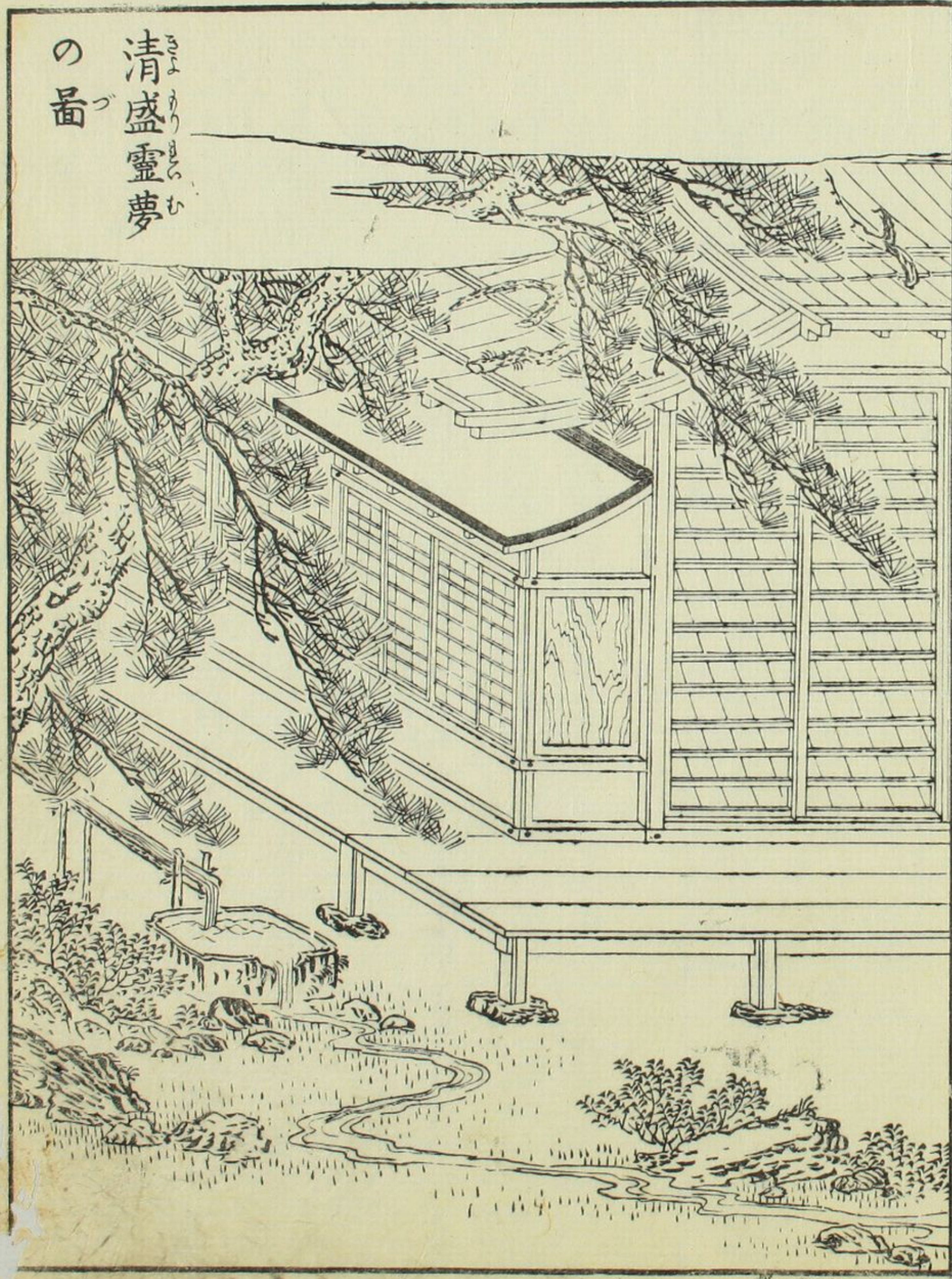
按小端正の年号帝紀小載せし所小て抄がつなり或ハ  
崇峻帝の朝端正の年号有りて五年小て終るはれを宗

峻帝即位二年ハ端正元年小當れりといひりて是を端正五年ハ推古帝即位元年と云ふ蓋し  
聖德太子傳と推古天皇即位元年十一月十二日明神は欠て現したまふ一法載せり此説據らるに  
似たりまた小部兼右の遷宮記ハ端正三十二年甲申鎮座したまへりといひり房頭記當社天文のころの相  
小年端正ハ年号ありて天子兩位法小といひりこれ大化前後正史小載せし年号かきこれ書小み  
元法興元年と推古元年の年号ハ伊豫國の佛碑小元法興元世推古元年法隆寺釈迦仏光後銘小元  
えたりかこのとく載のまゝ法傳ふる金石小元ゆき古代年号有りことよれ強ふきありて其後

鳥兔五百余年法經て社頭の荒廢甚かりしに平相國清盛を卜欠當國  
の守護たりしと記不思議小夢中此告有りて社頭法再建したまふ  
り其頃ハ人皇七十四代鳥羽天皇の御代あり欠古時なり記清盛高  
野の大塔法修造はるに七十有余此老僧の眉小八字の霜法無  
き面小滄海の波を疊かかせ杖の二股なる先小鐵の入たる法つて清  
盛小甲されり此大塔の造營こ持りてあり神妙なき爰小まこひ  
との願有り柳安藤の葭島と越前の氣比とい西海北陸境異なき  
と母金剛胎藏兩界として日出度處小侍なり氣比社の繁昌也



清盛靈夢  
の畵





と以て母嚴島の荒廢せり汝須く早く修理加へ崇敬以盡さば我身  
此榮華子孫の繁昌たる爲と申たまへりこはひつたる人にて座次  
らむはき見て泰とて人して其跡以見せたまふ三町をかり隔  
りて彼老僧の浄堂の中入ると見え一場の春夢をとりける清  
盛奇特の思ひ成なり下山の後院泰とて右の夢想成奏聞し任成延て  
當國小下り新小殿宇成改免作り百八間の廻廊成起し多居成建  
攝社末社小至るまで壯觀旧小まはまり修理功終りて清盛大宮小  
泰罷せり多るに天童忽然とて現り来り我は是大明神の淨使な  
り此劍成以て朝家の御固成を領しとて銀の蛭巻したる小長刀成  
賜ると見て覺しに實は其頭色小劍なり但し悪行はるむ子孫ま  
で是かをおまゝとせし淨託宣ありける 盛衰記平家 物語取意 加祭より一門  
此覺元はきたるごとくつひ小清盛朝廷の外戚とて太政大臣後一位

小歴上り威を一世小振ひたまひ母備小當社の浄をうへいと其お  
とはまけるはまはむらうと今母示現即託乃利生新小して上は  
天子此行幸成初免奉り代々將軍家の崇敬おらうとをとお持西  
討東征北伐南誅或は自ら蕪藝の礼を取り或は代幣を以てかなう  
を先當社小おいて軍陣のそ進成祈らるるをなし就中文永正應  
の頃異賊来寇せしにまた降伏の法祈りて此故小社頭の結構は  
日成逐ひて美麗小四時の祭礼は歳々小厳らなり百八の神燈長  
小日月と光成争ひ泰請来拜の輩は雲霞とて母り去来成絶を  
殊小此御神は海路の安全成守護たまふなまは澳漕ぐ船を  
奠成設て過き漁る泉部とまづ初穂をむさなふ誠小海西此  
大社小して當國の一宮と仰ぐ母また宜なるはや浄社は島の北面  
小ありて山小背き海小向ひ廣小宮居したまひ其の景たるや

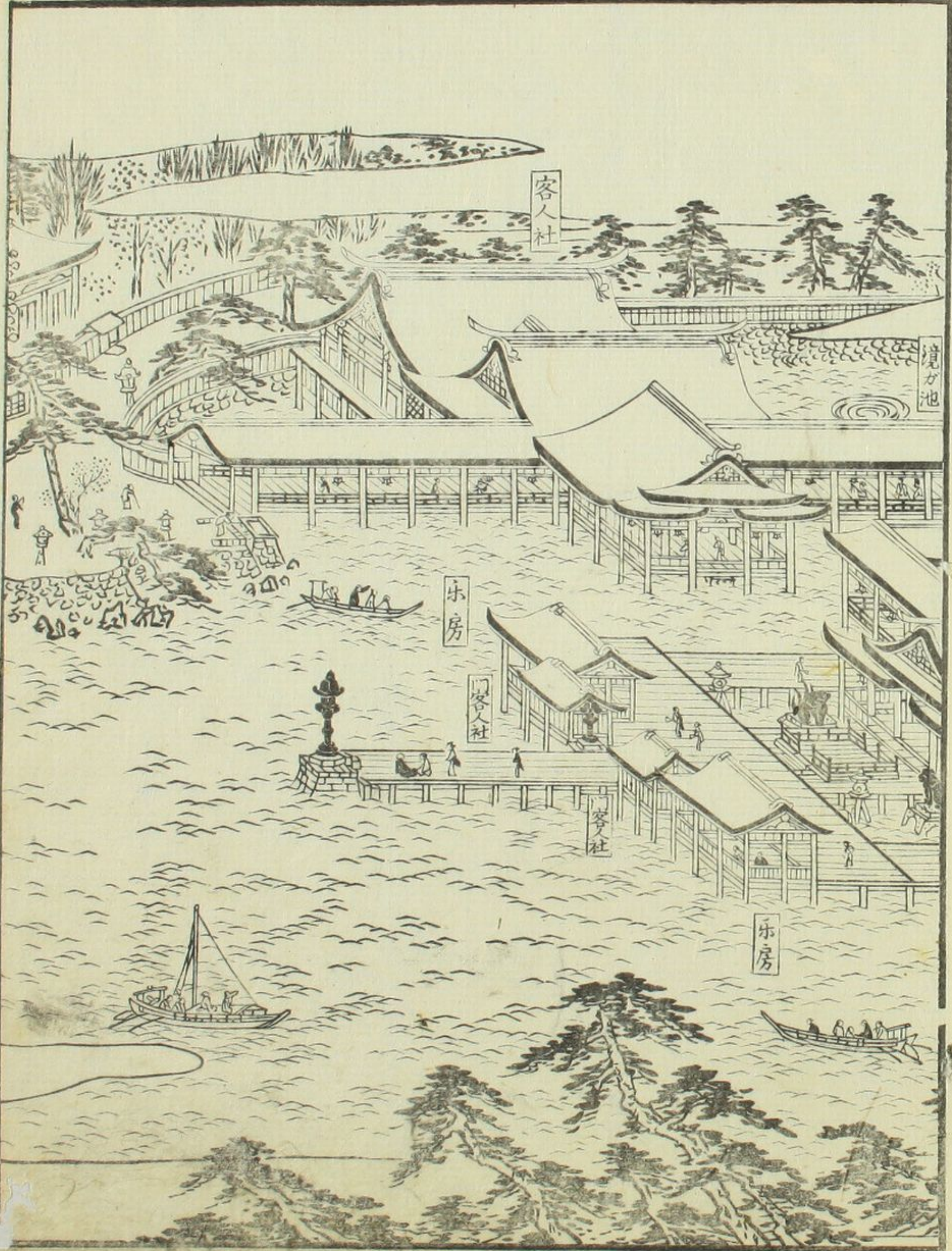


日域よち名なたる勝地しょうちにして先哲せんてつ既すで龍都りんと仙宮せんくう小比せひせるもまゝ其當そのたう  
初失はつしつなと次つぎとつわべー廻めぐる廊ろうと輪りん負おんたる宮殿くうてん潮水うしづの上うへ小浮せうぶ  
んで恰あたも唇くちびる樓ろうの波なみ小漂せうぶふごとく弥山よせん比ひ嶺ね高たかく聳そびへ松嵐しょうらん直ただに吹ふ  
落おちて蒼翠そうさい比ひ色いろ瑞籬すいぎ小映えい茅ちやうを猻は猴子こへい奴やつ負おんひて市頭いちとう小戲せうぎふき  
麋鹿みりく群ぐん奴やつ率ひきめて沙さ上じやう小卧せう次じ遙とほくに眺望てうぼう奴やつ極きまむきむきの蒼波そうは渺めう  
として遠帆えんぷの動うごくをと詠えいぜーれとむきつり且かつこ此島こしまの樺か多くー  
て百もも子こ多た嘯せうる春はる比ひころの峯みねと谷や社頭しゃとう浦うらこよ至いたるまで比ひくく小阿せうあ  
らさる取とちなく比ひながる雪散ゆきさん雪飛ゆきと一ひと格かくなる比ひくく騷人そうじん墨客ぼくかく乃なん  
を蕩とらり次つぎ中秋ちゆうしゆうの月つきの弥山よせんの上うへより出いでて銀色ぎんしき三さん子こ界かいとをながむを  
しまゝ雪ゆきの何なにれ殊こと更さら小こくくたを勢せう眺望てうぼうのわや三さん葉は比ひ冠かん  
たる也なりー

○西行撰集抄曰さいぎょうせんしゅうせうまひて何なにき比ひくくまの社やしろのうー比ひの山やま深ふかくーげ

りまの海うみ危ひらうの野の右みぎの松系まつぎなり東ひがしの野の小法せうぽうさなぐきつりこれ  
何なに法ぽうを洗せんとゆふ法ぽう社しゃ三さん不ふおをーま次つぎまこ次つぎー前まへ比ひ方に引退ひきひき  
て南北なんぼくへ三十三間さんじゅうさんかん東西とうざいの二十五間じゅうごかんの廻廊くわいろう侍まへる潮うしづの満みつと比ひ  
廻廊くわいろうの板敷いたの下したまで海うみ小なる比ひく時ときの白しろ沙しゃ五ご十じゅう町ちやうを比ひり  
なり然しかに何なにきとも比ひの比ひくくたを時ときまるまむ比ひくくて廻廊くわいろうの中ちゆう  
まであまるなり氣け高たかくいこ比ひりたともなく侍まへる但たいたいな  
る比ひりやるん法ぽう簾れんのうー小こを法ぽう正せい躰たいの鏡かがみをうけまゝせで  
法ぽう簾れんの下したにうけまゝを法ぽうたりう比ひ御おん神かみの女によ躰たいの神かみ比ひておを  
しま次つぎなまむかひなりは幣へいるやるんおをさる比ひ社しゃの山やま上うへ小こあ  
がり廻廊くわいろうの平地へいぢのうり東西南南とうざいなんなんの三方さんぱう暗くらまると比ひんを比ひみ  
侍まへるところは鹿しかを將まささむ比ひ山やまは小こ鹿しかなき草くさ小露せうろおち出いて  
おはうりに侍まへりーなまんな人ひとをこ比ひ法ぽう社しゃ比ひて比ひのまむなる





客人社

鏡ヶ池

乐房

客人社

客人社

乐房

かんや  
本社  
まろじや  
客人社

前権中納言持

うな原や

まきも

たごひ

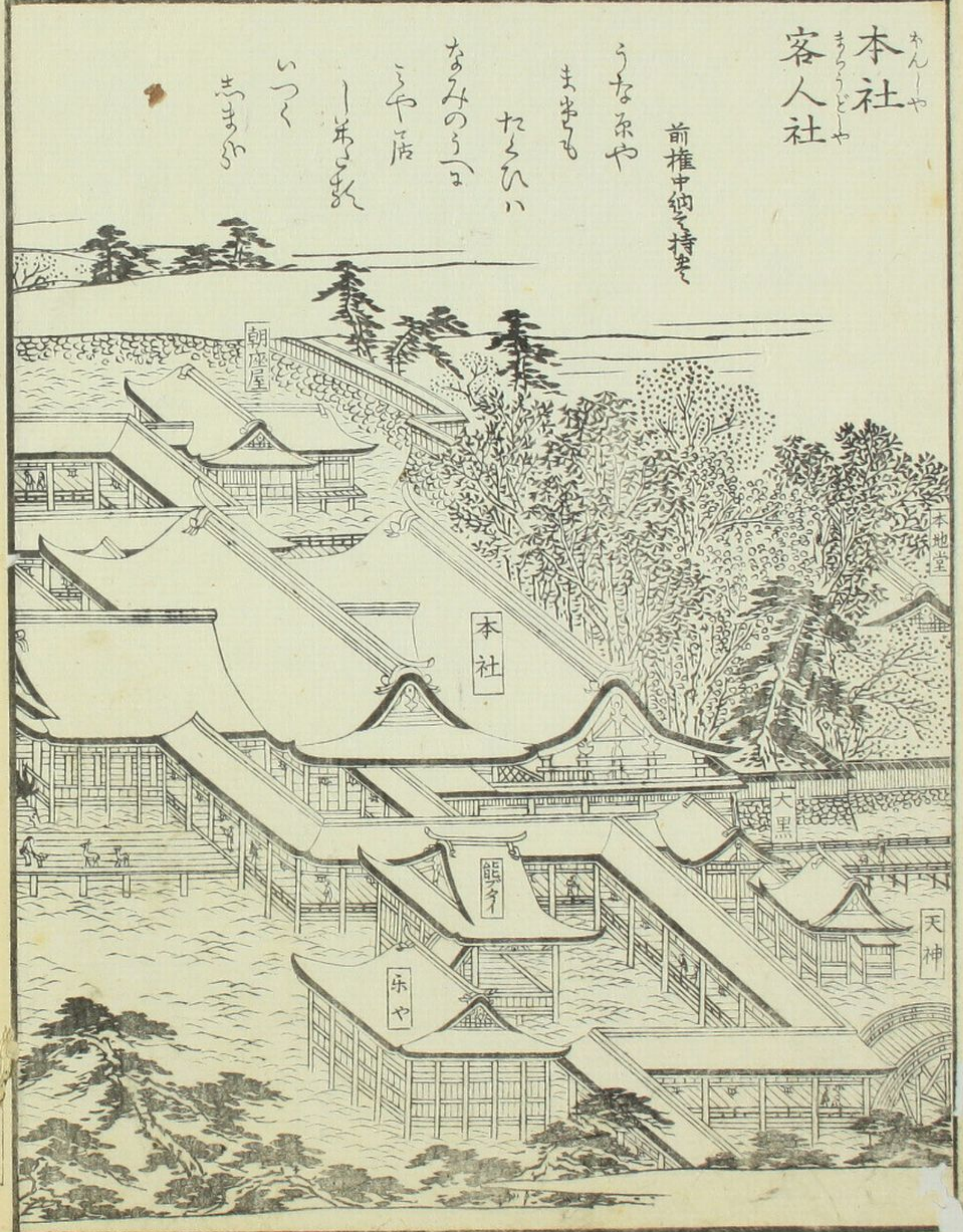
なみのうま

こや店

一舟

い

き



本旭堂

本社

天神

乐や

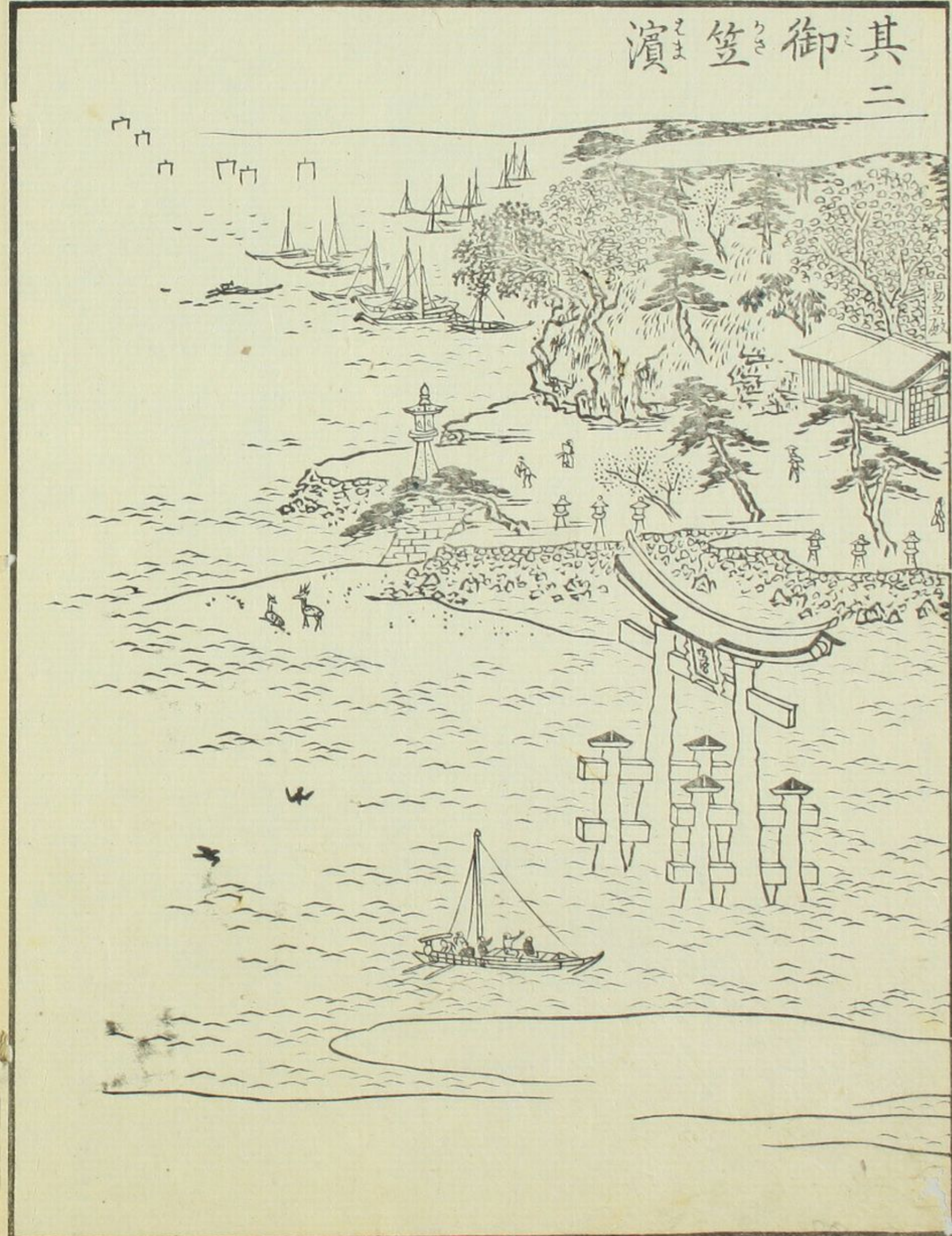
能多

大黒

朝座屋



其二 御笠濱



本藩加藤氏所藏宮墓貝の圖

貝大さ苗のこくーひさりの如き白丸  
 うひまで表小鳥居の紋あり文化乙  
 丑のこー大鳥居の洲小て拾ひ得  
 ものと持

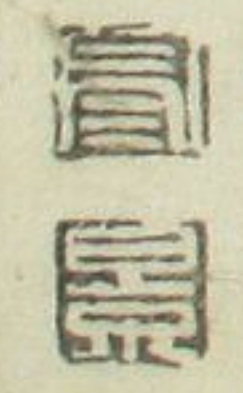
所々ちみのーいふ

おはるもくーる丸  
 神のまやうー貝

山田貴之



法橋有景寫





とろ特や傳へて侍る 按に撰集抄ゆふとこ後よくこ社地の景勝ゆなり但し其頃の本  
社に在る松林原野より今ハ市街了なり多く堂社  
御置たりいま伊靈川の齋ふなき松系たる後ふは葉るものなり

○大宮寶殿 明神鎮座の正殿をいふ 幣殿 正殿の前より折三  
十二間梁五間五尺余 間二尺梁二間五尺 ○三棟并殿 幣殿

の前のより折十五 間一尺梁六間半 ○夜殿 同殿の前より俗これを組入と称す  
折八間一尺余梁五間半

○高舞臺 伶人舞樂の臺なる處なり後殿乃まはらりて神殿  
小むらふ左右小唐銅の獅子石燈籠あり ○平舞臺 高舞臺  
左右より臺下北石柱三百二十本高五尺五寸圍 ○樂房二字 左右の分きて平  
八寸こらく赤間關の石切もちふ 舞臺小連なり

○門客神社二字 樂屋とちらびて左右の分り  
俗小神惠美湏と称す

祭神 豊磐間戸命 櫛磐間戸命

○廊 門客神社二字の間より長く延出して西北にむかう正殿よりこける凡三十六間より  
當社官殿中央の神殿をわさ長廊廻廊して蟠龍の如くこは處長くこし出た  
り依て俗は是と古先とあふ 唐銅の燈籠一基あり

○大黒堂 大宮の左 祭神 大國主命

○天満宮 同殿の傍より毎月連歌の會あり故に  
連歌堂とりよ古人の各句をちり

○客神社寶殿 大宮の右三十間あり西南小 幣殿 客神社の前より折  
かくふ折七間余梁四間五尺 二間四尺梁二間一尺 ○三棟

并殿 同取より折十二間 後殿 かなしく并殿の前より  
余梁四間四尺 折五間梁四間四尺

○廻廊 およそ百八間より間毎に燈籠一箇を釣るまて  
廊の板敷釘を用ひさる故小行歩小随て鳴る

○圓橋 大宮の左あり御池の架せり幅二間  
長十四間俗小及橋と呼ぶ

○平橋 大宮と客神社  
の間より

○瑞籬 大宮客神両宮の外垣なり長おのく  
百間ありこけもを玉の御池といふ

○御供所 本社の東あり

○湯立殿 客神社の  
北あり

○能舞臺 大宮の西南あり斜小神殿の對そ三月十六日  
より三日のる法樂神樂あり

○鐘樓 本社の右あり鐘大内義隆の寄附なり  
銘別より

○寶藏 大宮の南より庫中納むる処の宝物ハ  
別小持ふちうばる後篇とせり

○文庫 大宮の北より二十一史十三經をこく免として和漢の書籍板石部を納む中央小聖  
像をちり頼ハ文徽明の筆蹟と集字中へて名山藏の三字刻をまこ聯ハ東壁圖

○文庫

○寶藏

○鐘樓

○能舞臺

○湯立殿

○御供所

○瑞籬

○平橋

○圓橋

○廻廊

○廊

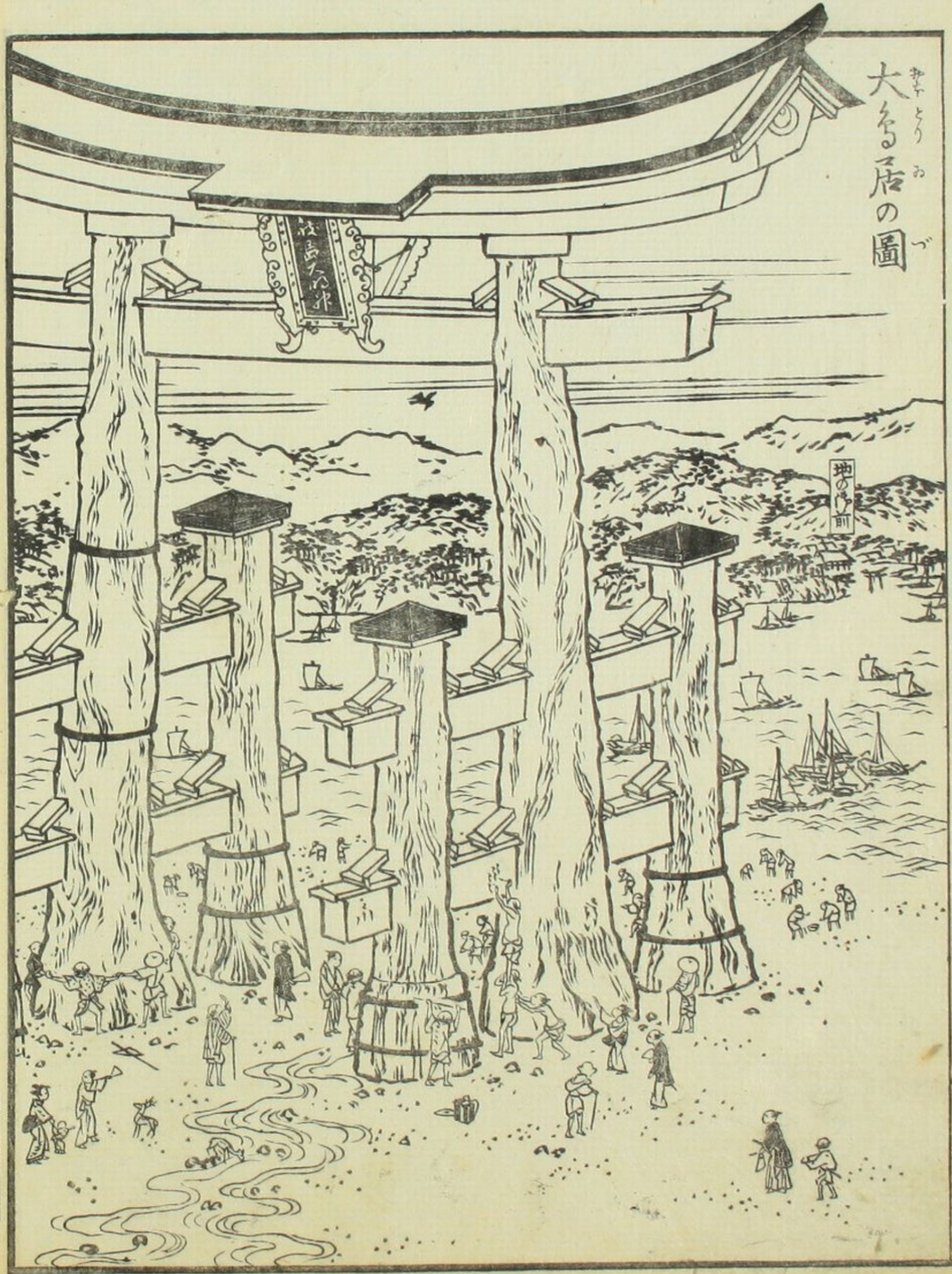
○大黒堂

○天満宮

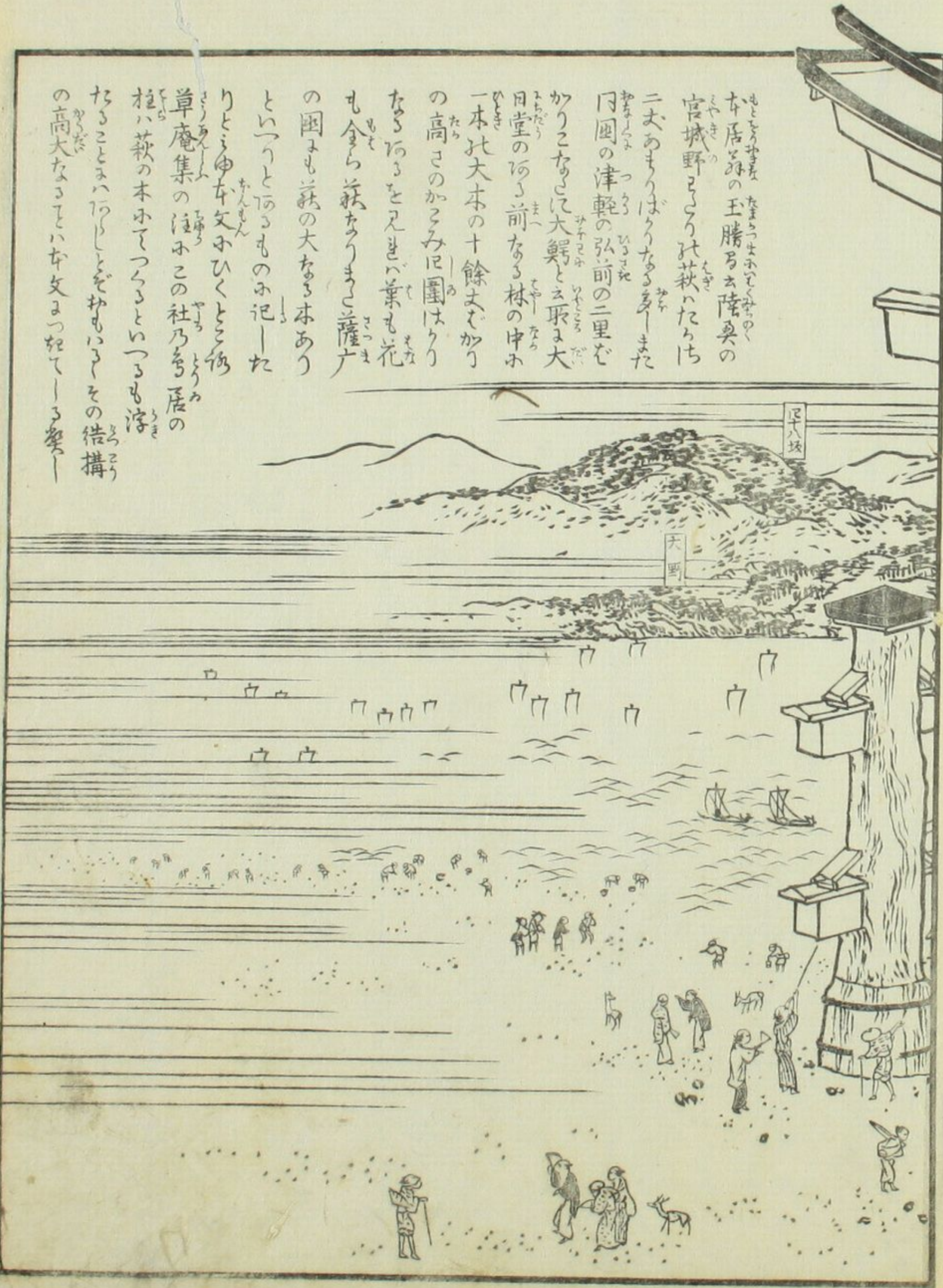
○客神社寶殿



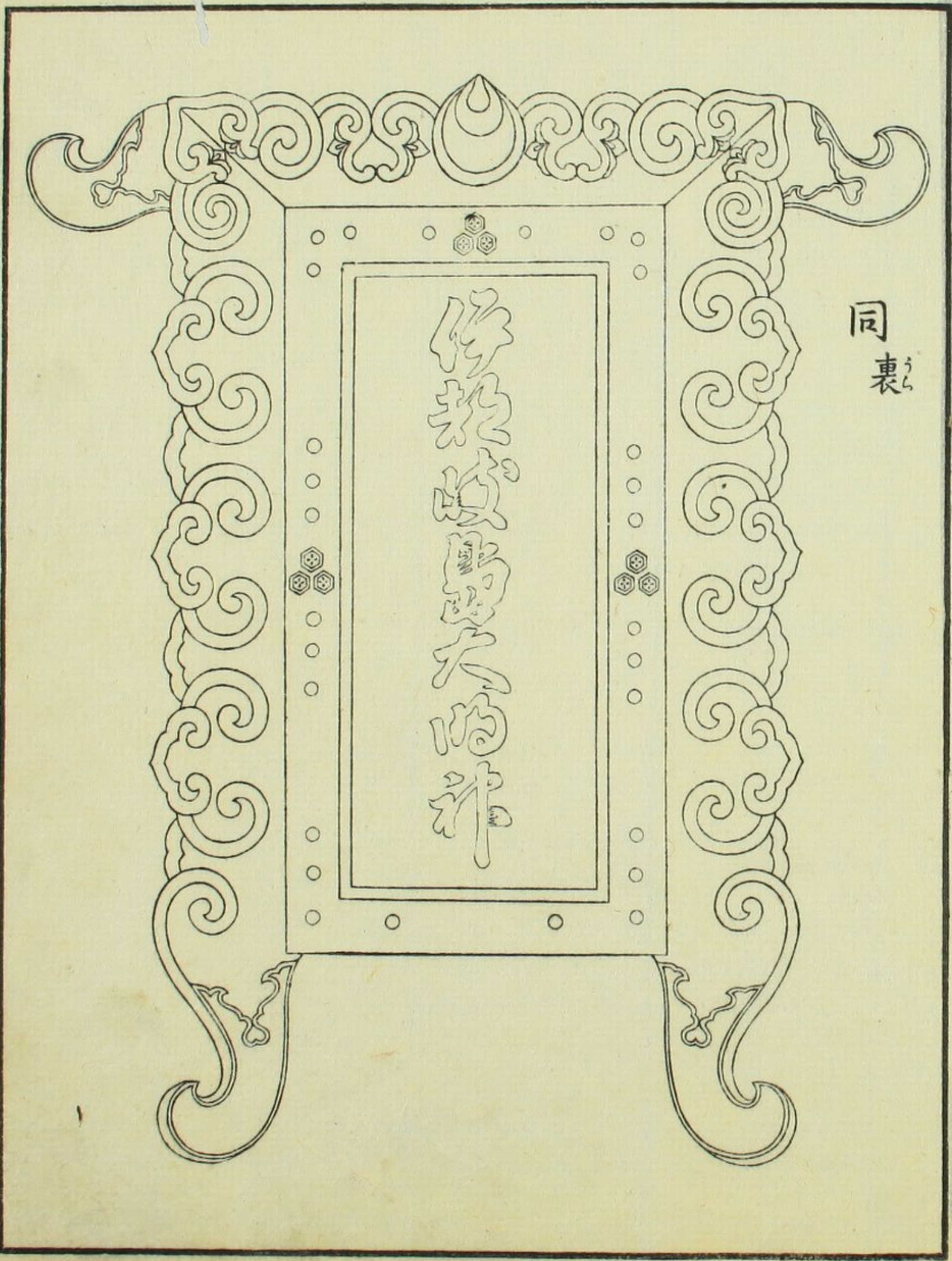
大倉居の圖



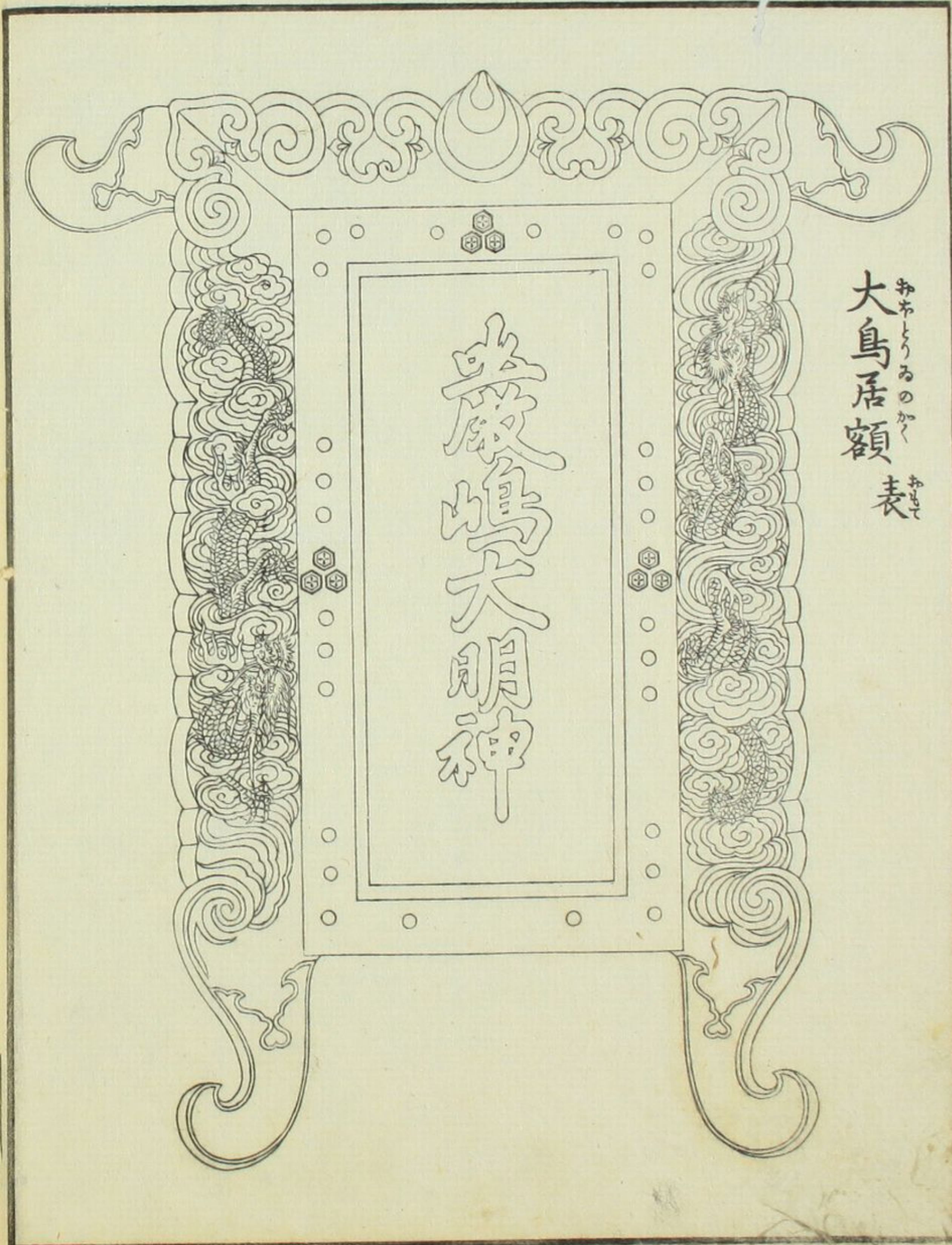
大倉居の王膳君と陸奥の  
 宮城野とて此秋はたは  
 二太あまうはくうなるまゝまた  
 円國の津輕の弘前の二里を  
 かりこちにて大舞と云取ま大  
 日堂の所前なる林の申ひ  
 一本此大木の十餘丈むかり  
 の高さのかるみに圍はくり  
 なる所をえき葉も花  
 も今ら萩なかりまご薩戸  
 の園もさ萩の大なる木あり  
 といつとあるもの記一た  
 りといふ本文みひくとさ修  
 草庵集の注みこの社乃倉居の  
 柱は萩の木にてつらといふも浮  
 たることまはししをわもらうその結構  
 の高大なるといふ本文まつて一る等一







同裏



おちしるのかく  
大鳥居額 表



為居顏二名際 震如  
三為子歲八音一  
道定一二名感為一  
滿是也此中一法一

古新

空神天長之世

大内義隆花押

二月廿五日

西

廣源社之形



書府西園翰墨林の句あり  
北島雪山の筆なり

○大鳥居 古先を去ること七十間余海上にたつ柱高四丈四尺三寸圍一丈五尺副柱高二丈八尺圍一丈一尺五寸棟長六丈四尺四寸梁五丈九尺六寸九右柱相去ること五間余結構高大なり

れよむこむ居改作ること數度まづ平家物語に清盛も居まで改作ると有りその後寛元仁治の間本社修造のと紀及先造りまゝ弘安九年應永四年天文十六年元文四年享和元年を以て次かく數度の經營みな小栗里利大内毛利尋てい本岸海の涉寄附なり按ふ草唐糸萩のこは後小萩州いつまらも居の柱ハ五抱一り一本ハ萩乃本小て作るともゆゆの頃なりなん島もそむ傳なり

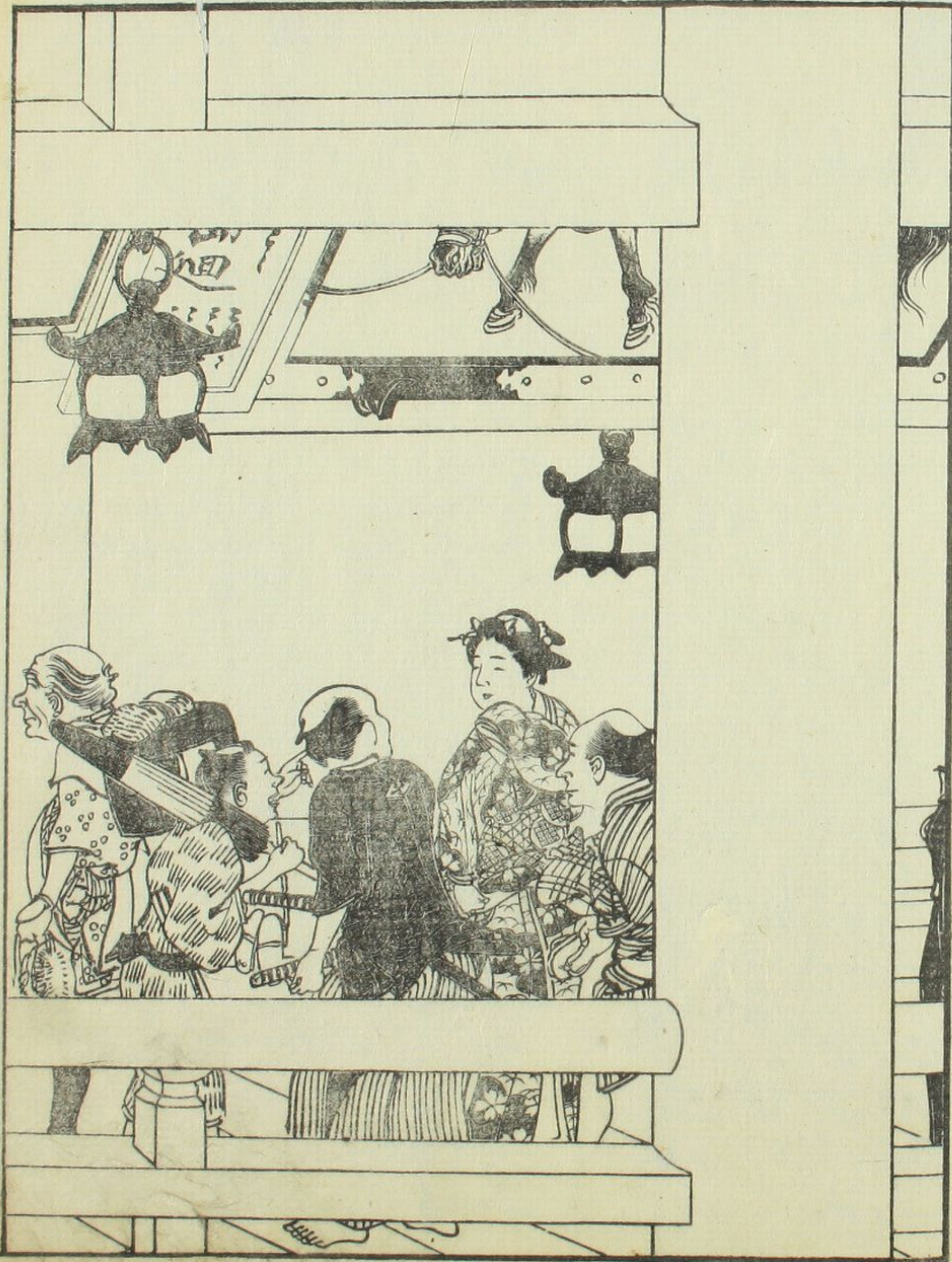
○同額 聖八尺三寸横四尺二寸 面みつて見え  
今の額ハ 後奈良天皇此宸筆ふして大内義隆の奏請して奉納すしなり傳へゆ昔の額表ハ小野之風裏ハ空海の筆なりと

按ふ玉海まひのうみ 高倉天皇の兼安五年七月十三日右衛門督宗盛以信基朝臣示送頼輔朝臣云伊津岐島額可申請

有恐本額前大僧正被書之今亦立鳥居仍可打額申他人有悞由也可然之様相謀可令申と有りま多安元三年六月十八日今日召平明送伊都岐島額於右將軍之許来月入道相國相共可參請彼社抑件額字都津兩字未決仍尋官文殿式正之く處為都字之由隆職已注申仍用件字と有り小よれむう此乃風乃書といつる承安元より前つて此となる也

○繪馬 上諸侯より下庶民小至るまで萬國より献奉る所ありて其數多なる凡天下に冠たりまづ本社に組入れうちより初て客神の宮三棟棟殿東西廻廊此間透間となくかけなく其大なるも凡堅九尺横一丈二三尺小至ると此有りてみな名画の巧く其畫せり





あま  
こ  
づ  
繪馬を觀る面

印



就中古法眼元信の牛若常信の七福神狩野元近が馬尚信の羅城  
門土佐某が三十六哥仙うたひ山崎宗鑑の筆なりおまゝく哥仙繪の  
古佐家書ハ昭高院道澄親王曼等世のよく知るとも改なりその余  
石川元近をとり近世諸名流の墨跡とよりおまゝにいと海  
あゝと云

○社頭修理 推古天皇の弟代佐伯鞆職官奏成經て始て宮殿を  
創建を定むひ傳ふこれ尚社造管地始なるべし其後法盛攝社末  
社廻廊鳥居に至るまで悉く修造せしむる平家物語も見えたり但し  
其間修造のことろ幾られ典故の徴もなきなりを考るとも改なりし  
そはち仁安元年祠官佐伯景弘が修理奏状ハ神殿并ハ舎屋私カ  
を以て改作すよ見えたり建永二年ハ殿宇回祿せしは官使を下し  
地を檢し造管を命ぜらる建保三年ハなほり貞應年中まゝに回祿

を四ヶ年の後安貞元年ハ平宰相經隆南國の司として下向造管  
地をとり天福年中祠官親實大工少工鍛冶松尾師瓦師など  
の諸工ハ鎌倉より召よせ造管地とて改勤しむつひハ嘉禎元年  
勅して南國を社家ハ附せしれ八年ハ召し貢をともし兩宮ハ修造  
し奉る仁治二年大半調ひいげいまる全備せらるを以て寛元二年  
應宣を下しまる井原の地を神領ハ寄せしれ造管の料を助ぐ  
き旨命せらる其後ハどめて弘治元年毛利氏陶全善と合戦の刻神  
殿まで焼くしけ吉川元春の力ハより災ハ免れしこと隆徳太  
平記ハ見えたりはきど神前を清久んがたえ同二年毛利家より廻  
廊板を改作らる永祿年中和智豊郷同湯谷久豊兄弟ハ神殿  
おいて謀せらる此職ハよりて毛利家より改造せらる元龜三年に  
成就せしは神祇官吉田兼右下向ありて遷宮の式いと嚴重



ちりり

○攝社末社

- 大元神社
- 山王社
- 今伊勢神社
- 杉浦神社
- 青海苔浦神社
- 御床浦神社
- 牛王社四取
- 地御前社
- 天王社
- 角振社
- 龍宮明神
- 道祖神社二取
- 惠美須社四取
- 鷹巢浦神社
- 山白濱神社
- 包浦神社
- 熊野神社以上島内所々
- 速田大明神社
- 大瀧大明神
- 官幣社以上島外所々
- 白山神社
- 湯殿山神社
- 荒神社二守
- 腰細浦神社
- 洲屋浦神社
- 養父崎神社
- 大頭大明神社
- 惣社

○社家供僧内侍社役人職名

- 棚守職一負
- 大行事一負
- 修理行事一負
- 客神社棚守職一負
- 神樂男六負
- 御湯立祝者十二負
- 鑄物師
- 國府上卿属官九員
- 上卿職二負
- 檢技職一負
- 小行事一負
- 樂方十五員
- 仕人七員
- 大工職一負
- 瓦師
- 祝師一負
- 横竹職一負
- 地御前棚守職一負
- 内侍職三十一員
- 神馬別當職一負
- 小工職一負

○座主

百練抄曰承安四年三月十六日法皇後白河建春門院臨幸安莚

修理別當職

社僧十五坊



巖島四月九日還幸云々

按ふ此時右大臣藤原俊經建春門院の御願文抄書一こと盛衰記亦見たり

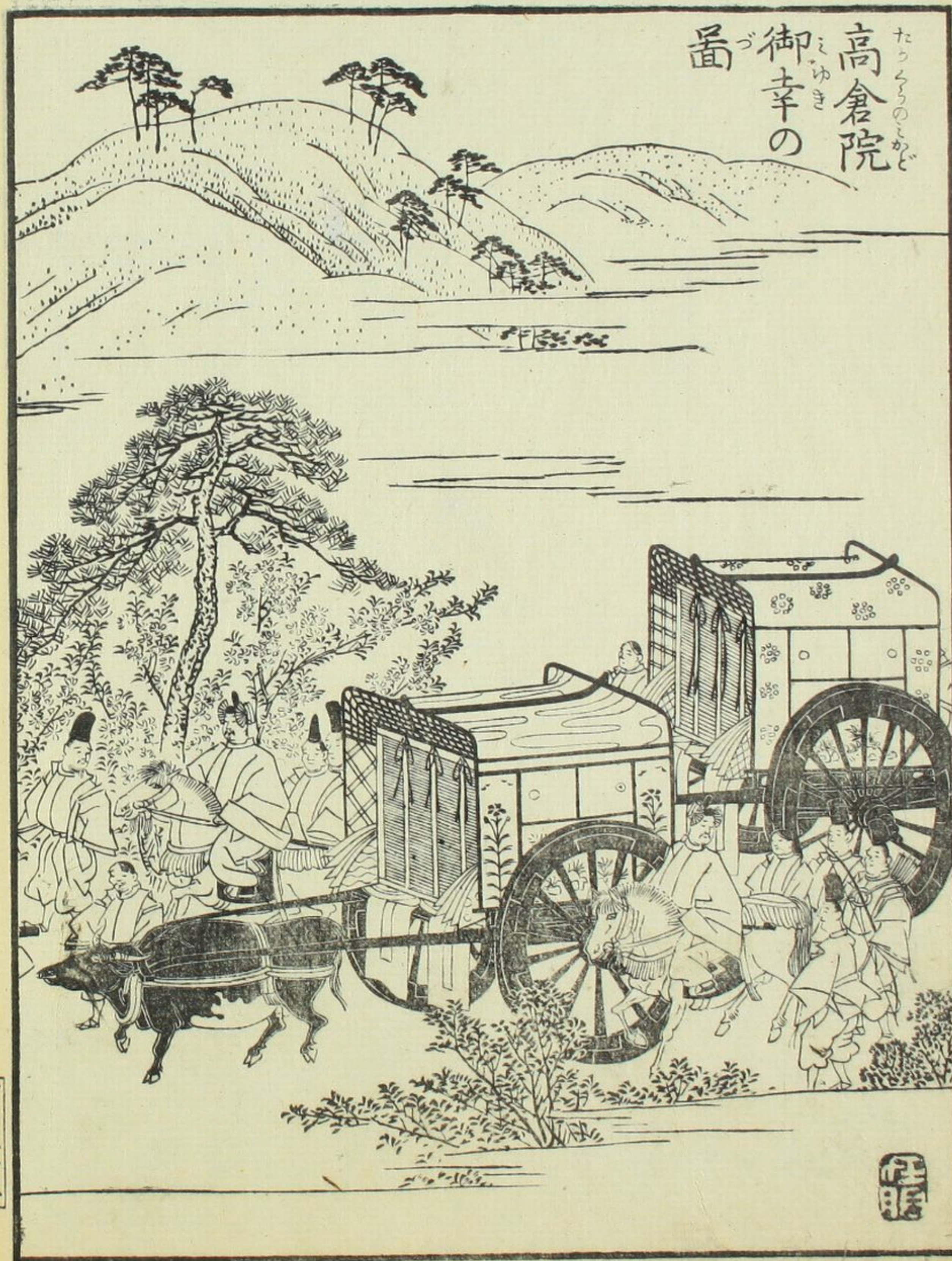
○梁塵秘抄口傳集曰あねのくわいつく一建院よあひぐりてま  
あることありきやよひ乃十六日京をひでつちな一十月廿六日ま  
りつくり室殿のさま廻廊なぐつてきたるよ一ちたつていそ  
らうれ下まで水たつ一り海のたつて浪一ろくちちてながれ  
たるむら一山を足き海の本くみな何をこころてみどりなりやま  
みたかえろぐんせねの石水際ホ一ろくそはびてたり白浪時く  
うちくる欠けこきことかぎりな一ねとひ一より母おも一後く見申  
そね乃内侍やうりくら寂迦なりかろ装束城一髪城あげと  
舞をせり五常樂狗銜をまふまかくのぶさつ神ありんもか  
くやありんとおおえとく免でたり紀上達部殿上人樂人太政入  
道そのとも人のまご座城たぬおどにまはしきみことと年よれ

る女奴具して人またきり我みむらひて居勢ひを屋うりれま  
う次そのいちなふ一後世のこと城かろおれおれおね一免せ今  
格城まらむやとゆああまりをほめて一母置たりつて次榮き  
屋うもなきて何ふおちたびく一を資賢城よびてこはこ  
へとつふ畏りて居たりなちまきむといつてをちなくして次

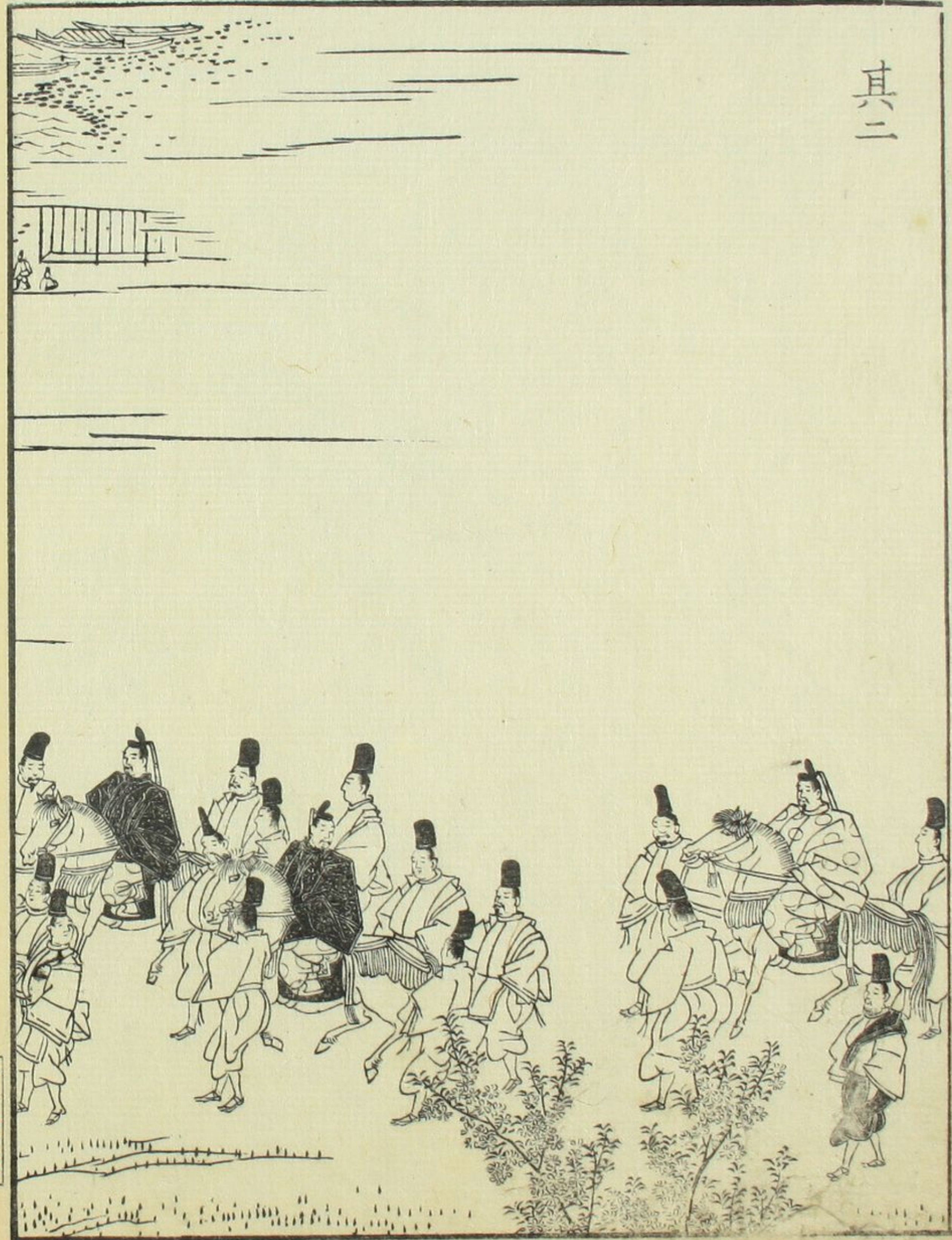
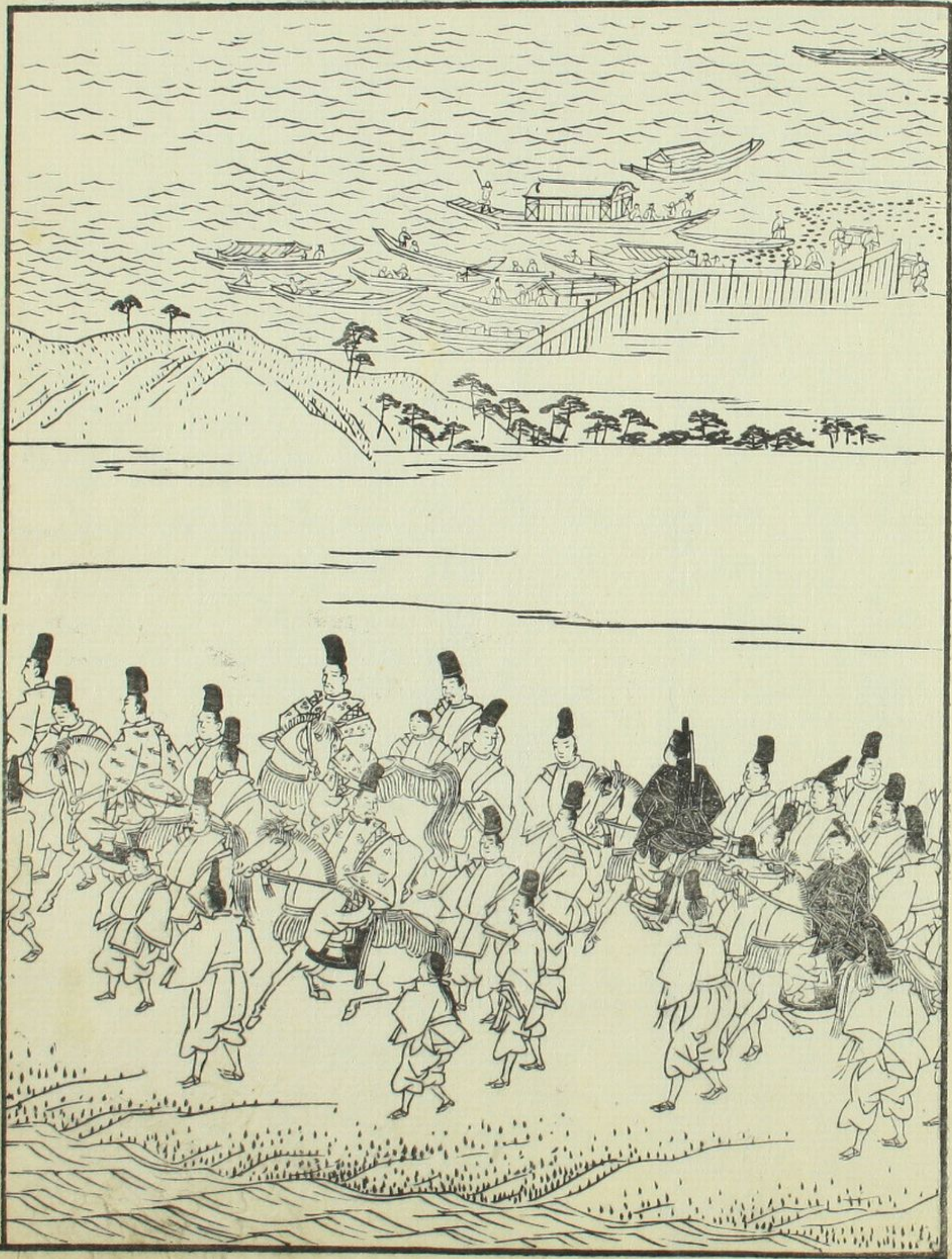
次舟の声聞いさばうりよろこび身より母あま  
ら舞一見たらが後世のちとけをとならに時ほ  
るふおれむ

とつてこれつけといつど資賢あつてつてなきて二返城ありま  
ねるは後世のこと他念なくまらほり城ひひ出たり一は信お  
案てなむとおさ一がかり紀太政入そこれ清神の後世をカ城よ  
ろこはせたまふよ一まうはせ一うはねぬがよ現世のことといまう









二二二



ぬう(ふはあり)うは後世(ごせ)知(ち)りひひでたり(なり)

○百練抄(ひやくれんせう)曰(い)治(ち)兼(けん)四年(しよん)三月(さんがつ)十九日(じゅうくにち)新院(しんいん)高倉(たかくら)嚴島(えんじま)御幸(ごきよ)

○山槐記(さんくわいぎ)曰(い)治(ち)兼(けん)四年(しよん)三月(さんがつ)十九日(じゅうくにち)新院(しんいん)令(しよん)泰安(たいあん)菟(う)國(こく)伊(い)都(と)岐(ぎ)島(じま)給(たま)

四月(しがつ)九日(くにち)還(かへ)幸(きよ)御(ご)幸(きよ)間(ま)被(ま)行(ゆ)勸(かん)賞(しょう)從(じゆ)四(し)位(い)上(じやう)平(へい)資(し)盛(せい)福(ふく)原(げん)正(せい)五(ご)位(い)下(げ)

平(へい)清(せい)邦(ぱう)同(どう)從(じゆ)五(ご)位(い)上(じやう)菅(かん)原(げん)在(あ)經(けい)國(こく)司(し)賞(しょう)安(あん)神(かみ)主(ぬし)景(かげ)弘(ひろ)祝(いのち)師(し)支(し)之(し)巳(し)上(じやう)人(にん)

御(ご)導(たう)師(し)前(ぜん)權(けん)僧(そう)正(せい)公(こう)顯(けん)追(お)可(か)請(しよん)在(あ)經(けい)被(ま)聽(りやう)新(しん)院(いん)昇(しやう)殿(てん)後(ご)日(にち)相(さう)尋(じん)帥(しゆ)

大納言(おほのくわんごん)隆(たか)季(せき)被(ま)答(こた)還(かへ)

高倉(たかくら)天皇(てんかう)御(ご)幸(きよ)記(き)

土(つち)御(ご)門(かど)内(ない)大(だい)臣(しん)通(と)親(ちん)公(こう)作(さく)

治(ち)承(じやう)正(せい)年(ねん)以(も)つ(つ)一(いつ)後(ご)へ幸(きよ)何(なに)も(も)と(と)公(こう)々(さう)帥(しゆ)大(だい)納(な)言(ごん)

言(ごん)隆(たか)季(せき)孫(そん)大(だい)納(な)言(ごん)實(じつ)國(こく)五(ご)條(じょう)大(だい)納(な)言(ごん)邦(ぱう)綱(つな)土(つち)御(ご)門(かど)寧(ねい)相(さう)中(ちゆう)將(しやう)

通(と)親(ちん)殿(てん)上(じやう)人(にん)中(ちゆう)將(しやう)隆(たか)房(ぼう)兼(けん)光(こう)清(せい)幸(きよ)被(ま)行(ゆ)行(ゆ)け(け)た(た)ま(ま)り(り)

行(ゆ)ふ(ふ)木(き)二(に)頭(かぶ)家(け)則(すなは)ち(ち)政(ま)卿(きやう)前(ぜん)右(みぎ)大(だい)將(しやう)宗(そう)盛(せい)以(も)亮(りやう)重(じゆう)衡(かう)泰(たい)後(ご)の(の)中(ちゆう)

將(しやう)時(じ)實(じつ)な(な)ど(ど)は(は)て(て)女(に)房(ぼう)五(ご)人(にん)を(を)か(か)り(り)は(は)り(り)と(と)ま(ま)り(り)人(にん)か(か)

わ(わ)く(く)次(つぎ)と(と)わ(わ)が(が)勢(せい)ど(ど)は(は)ま(ま)る(る)に(に)船(ふね)お(お)か(か)び(び)た(た)く(く)み(み)つ(つ)の(の)深(ふか)み(み)つ(つ)勢(せい)

た(た)ま(ま)ふ(ふ)中(ちゆう)累(らい)弥(や)生(せい)サ(さ)お(お)し(し)申(まを)の(の)時(じ)小(せう)あ(あ)き(き)は(は)ま(ま)り(り)海(うみ)と(と)り(り)と(と)り(り)

お(お)つ(つ)く(く)こ(こ)は(は)て(て)な(な)う(う)わ(わ)ま(ま)て(て)髪(かみ)切(き)り(り)ひ(ひ)身(み)法(ほふ)法(ほふ)宮(みや)島(じま)ち(ち)ち(ち)

なり(なり)あ(あ)ら(ら)り(り)と(と)お(お)よ(よ)き(き)ん(ん)印(いん)お(お)を(を)廿(にじふ)六(む)日(にち)空(そら)の(の)く(く)り(り)た(た)ら(ら)り(り)の(の)わ(わ)く(く)

神(かみ)の(の)ん(ん)と(と)う(う)け(け)ら(ら)る(る)を(を)勢(せい)た(た)ま(ま)あ(あ)ま(ま)や(や)と(と)あ(あ)ら(ら)る(る)母(はは)う(う)孫(そん)て(て)ま(ま)る(る)

日(ひ)は(は)一(いつ)つ(つ)る(る)ち(ち)に(に)出(い)で(で)せ(せ)た(た)ま(ま)ふ(ふ)午(うま)の(の)時(じ)小(せう)宮(みや)島(じま)お(お)つ(つ)せ(せ)た(た)ま(ま)ふ(ふ)神(かみ)宝(たから)

お(お)か(か)孫(そん)尋(たね)ら(ら)る(る)う(う)孫(そん)て(て)ま(ま)り(り)設(たま)り(り)た(た)ま(ま)よ(よ)か(か)以(も)陰(いん)陽(やう)師(し)の(の)船(ふね)暫(しばしば)ら(ら)く(く)

ま(ま)る(る)く(く)空(そら)お(お)け(け)り(り)お(お)と(と)後(ご)の(の)う(う)ら(ら)さ(さ)海(うみ)眼(め)と(と)ん(ん)も(も)お(お)よ(よ)を(を)次(つぎ)大(だい)唐(たう)の(の)湖(うみ)

心(こころ)寺(てら)と(と)か(か)く(く)や(や)と(と)名(な)え(え)神(かみ)山(やま)の(の)洞(ほら)な(な)ん(ん)り(り)う(う)た(た)ら(ら)ん(ん)ら(ら)次(つぎ)宮(みや)島(じま)

の(の)有(あ)乃(の)浦(うら)小(せう)神(かみ)宝(たから)と(と)お(お)た(た)て(て)湯(ゆ)お(お)り(り)社(やしろ)司(し)持(もち)衣(え)な(な)ど(ど)着(き)た(た)

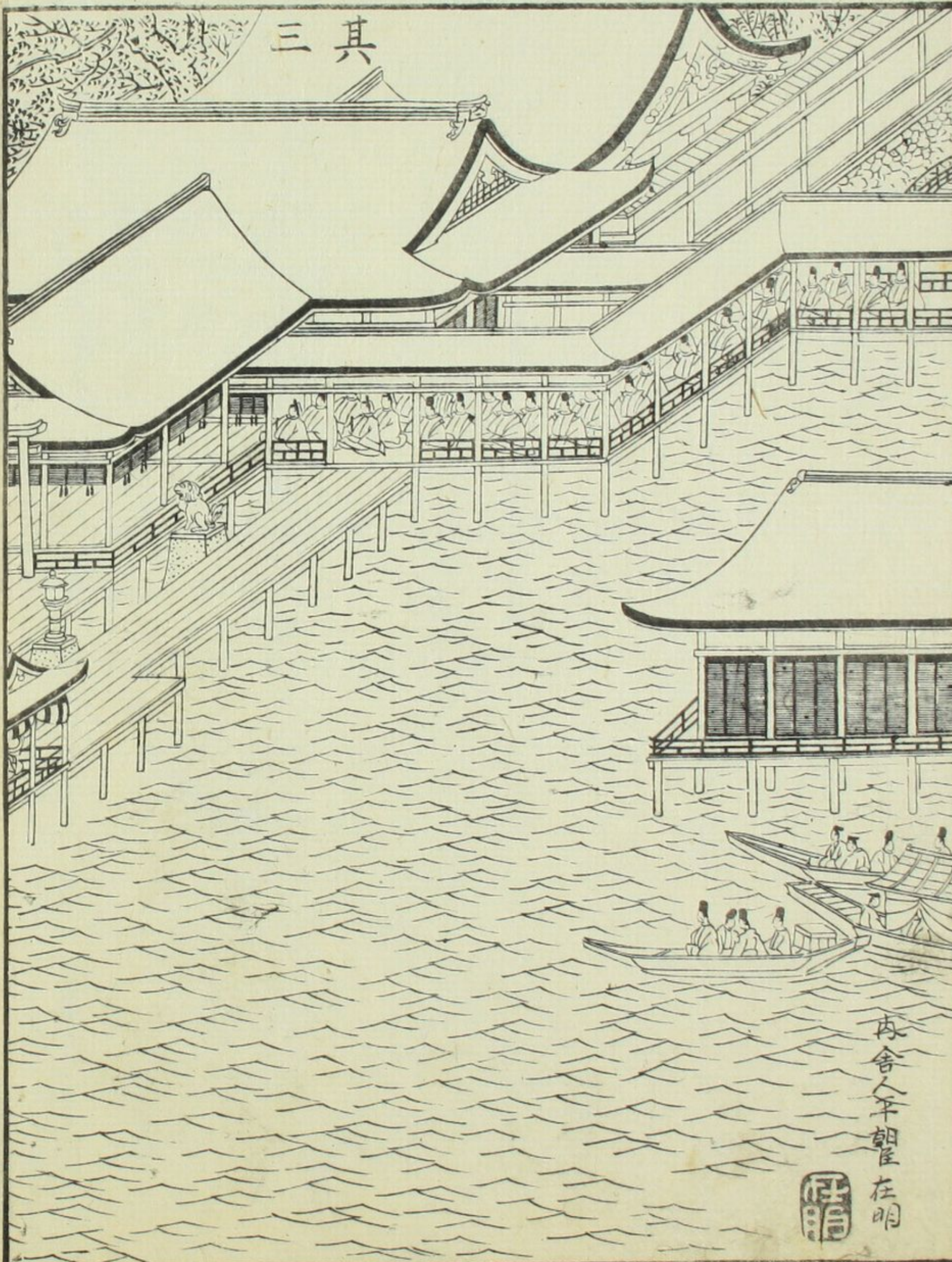
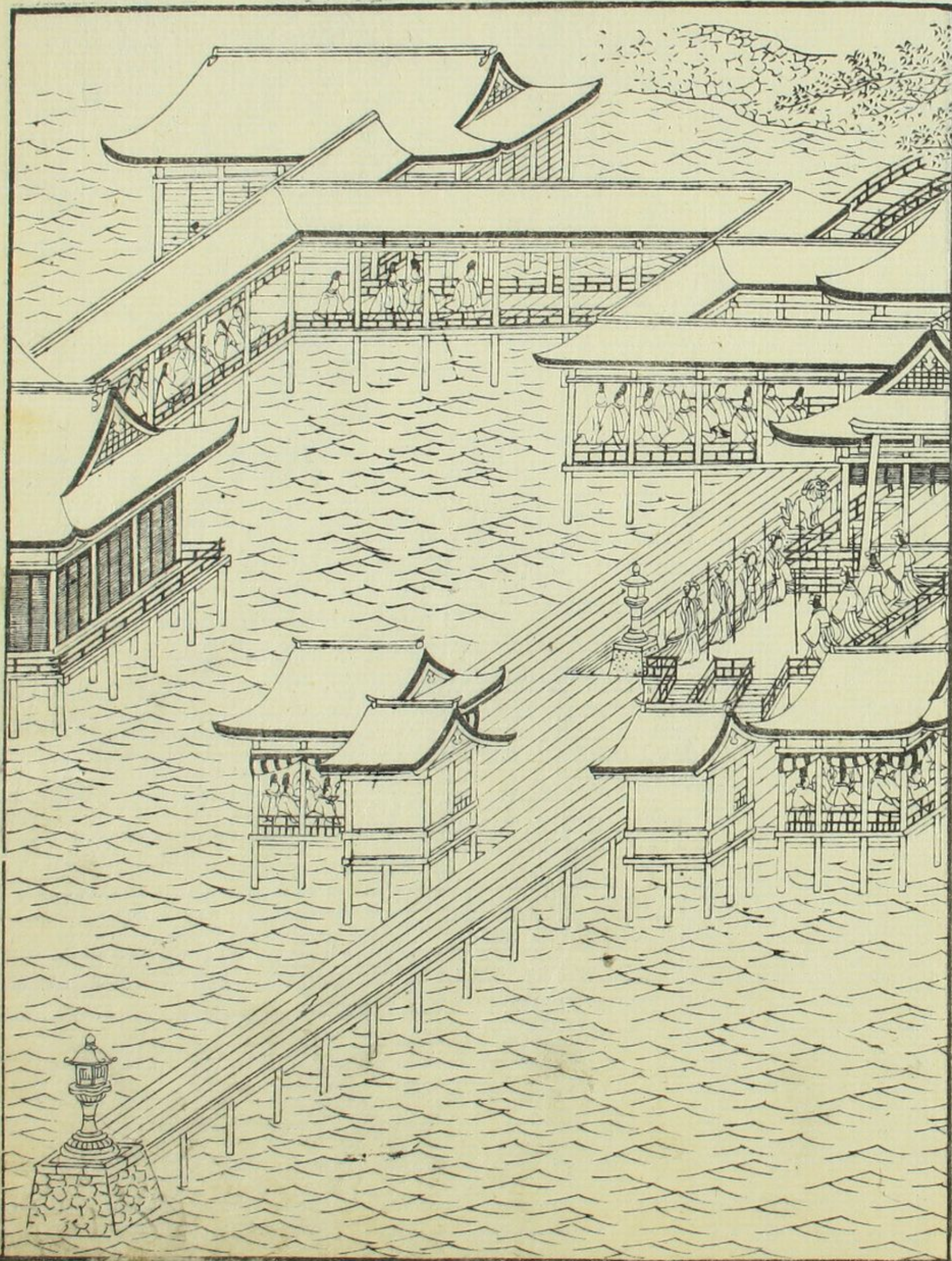
ると(と)此(こゝ)神(かみ)宝(たから)と(と)ち(ち)て(て)ま(ま)あ(あ)る(る)大(だい)幣(ぬい)小(せう)袷(あはせ)ひ(ひ)清(せい)衣(え)や(や)て(て)ま(ま)あ(あ)る(る)は(は)る(る)



時実の中おとつきてまゐるに潮いくちせきて湯所へ湯舟  
ゆき祢むはしち祢きてせかりとせたまふ公に湯舟祢むは  
らひて宮へ湯の南のかこ三間口面此湯所つらて障子此  
繪とて海のかさをせかきたるうみのうへながはまで廊をつら  
つけくしわみとせ湯船をゆしよ解ん支度をせし湯  
湯殿などつらて緋の湯浄衣欠てゆでせ給ふ湯所のひ  
んがし此庭の白木の葉をたてくも解しきて白妙の幣  
解よせつる此ひがし唐櫃の蓋をたけて金の幣をおく其  
西小葉坐解きて陰陽師の座と次神馬一疋たつ丸湯厨  
信定時棟こけをひく北面などといまこは欠ちせ祢むは供  
よ上達部の侍をせりける隆房の中將湯前ゆはが御官  
内少捕棟範役送をとむ湯襦をて勢まの口使湯沓持

て先小まゐる廻廊のまたの淡を欠らてまゐる廊を通りて  
まゐせたまふくお此湯所の一二町をなほ母蓮ささくせま  
あせしに欠しなせぬ湯沓もいふとせおがゆは上達部  
殿上人湯供小候を客神の宮よまづまゐる勢たまふ金銀の幣  
やこゆげ白たの幣神官とりて室前小伎なせたる特殿  
のうちねねど高麗の半帖一尋湯沓の坐と次金銀の幣ハ兼  
光の弁つらて隆季の大納言つら取てまゐる湯沓終  
りて帰せせたまふ祝師たまはる湯琴一湯琵琶一湯柏子横笛  
うけらて室前小伎くわく内侍共色くさまへにそらせきて  
錦をたら着たり縫とせし眼もんとおまむは湯神樂をは  
りて大官（まゐる勢たまふ湯奉幣とて湯經供表あり金泥  
の法華一部壽量品壽命經つらうせたまひる湯奪師





三其

再舍人平朝臣在明





公頭僧正まゐりてこれより御下り九重のうち御いで八重  
此夕路をこけまゐらせたまふ湯志などきく人神をばり  
あへむり上るるけしもの一とを糸一包をせたまふりるげん  
屋うあふせしる法眼一人なしたまふ神皇系弘くろあげさ  
はせたまふ宮島此座主阿闍梨小なしたまふ安菟守在經加階  
ひとしな何んさせたまふ院の殿上申はる隆季大納言兼光小  
作せける湯神樂や奴と丸八人きぬ一具まことなとたまは勢け  
る日くれて帰らせたまふ上達部殿上人の宿所を御つし  
て設けり内侍どもも屋形をいつひておのく次ごけ  
る月此の夜なまふばゆにわをい強うま一月なき空を  
ぞくち御くおをひあひたる古七日空のく一紀うらら暗ま  
たりておりお駕ねとは勢やま此木蔭小うらゆら急を夜

をこえて潮とて湯所のるへまどはりりたるまをこれお母  
此有さまとも見えむ供湯などはまらば湯宮免ぐりたる  
勢一とて宮へまゐるをたまふ今日ハ布の湯浄衣をせめ  
したる國々此守どもまゐる勢たるを此宮はるへおはこびおく  
廊のまへ小楽屋御つりて持殿をなたり内侍ども老たる  
まう紀さまく何ゆつりなりて湯供まゐるをとりつりて樂  
どもして湯戸ひり起てまゐるをそれるらば官司神人  
まで物をたはる廳官などをもち給ふ内侍ども金紙  
はへ錦をたちてはまのの花をつきて大口紙きて天樂つら  
うまする八人なまびたり天人のわり何をぶらんをかくわとを  
お申ゆるその後まかりおぼこなと舞ふ樽とほる花ごめ  
もんもおよむ次 中畧 夜小ひりまらはこよひ御通夜ある



登一とてふらふをたまふ内侍ど母あつりて夜も次ぐ湯神  
樂あり更なるほどに七ふなる小内侍あるに神つらと終て始ハ  
倒きふして時中をかりたまひりよ一紙となし内侍ど母カ  
へて程履てひきいづ湯神樂つらまつる勢きよ一作せられ  
て神主免一の侍はあくのこも母まうはる眼とちやり  
ゆいにとうがひをなほ人もありぬきよは一とゆふひなき  
もたつさま一法文などぞたて湯神のはづ免てこれあり  
あと残れまほひ一こといとてや次死く人なまご残れを次と  
ゆふとなし入さ免一いで作らるること母ありこれを人き  
う法善經に壽量品残たび一誦しる額をかこふけぞ  
とゆふことなり一或る氣高き女房う一後の障子にうつり  
て宝殿に向ひたまふ次ごと残れなるなとや人もあり常ぬ

ありとねがえぬ自ひ神殿のうちよ深ううは一くふちひに  
阿まこれらきほまごあひき誠小高唐の神女のかのやうたほ  
わりて帝はゆ免わりて朝小雲となり夕小を雨となん  
と契りたてまつらんあも母くやとぞねがゆるあまごこに  
なり一う倭社の鶏こゑく一うらぬととた婦波の音をた  
めく瑞籬をうらふ一汝らよや白樂天のうらねこれゑい來く  
耳ゆいさとつらりるをききてい風情母たぐみたりるまやとか  
あくとりあつ兼たる拵く此ありさほいひ盡一がどしかくて  
明よりうば湯飛一う撃う勢たまふ廿八日これとたり浦くど  
らんをべ一とて泉邸ども潜れせはせたまふから花田乃  
うり此湯衣一唐後白た湯衣二湯大はたてまつ  
らせたま婦湯衣がごいみじうなま免一う見えはせれ



まふ浦づてひては—まはして清鏡次まことに仙の洞もかくやを  
龍宮土をこれをはりやとおぼゆる處にむかひりみる光  
などともある時とばかり清鏡—まわりて歸せたまふ辰の  
時ふまた清宮免ぐりありてやがて清船ふたてまつる島に  
うち母ねと後く—くはに地あひたり  
下畧

○百練抄曰治承四年九月廿一日新院御幸嚴島第二箇度也云

○古今著聞集曰治承四年九月嚴島ふ清幸たり々々祭清願文みづ  
うら清草ありて殿下普賢寺殿清書せは勢たまひたり希代にみよやか  
の清願文ことには免でたり々々後日ふ慈人宮内少輔親經表紙  
かきて奉りたるとなす

○同書曰治承元年徳大寺實定大将を望み成就せむつ—ま

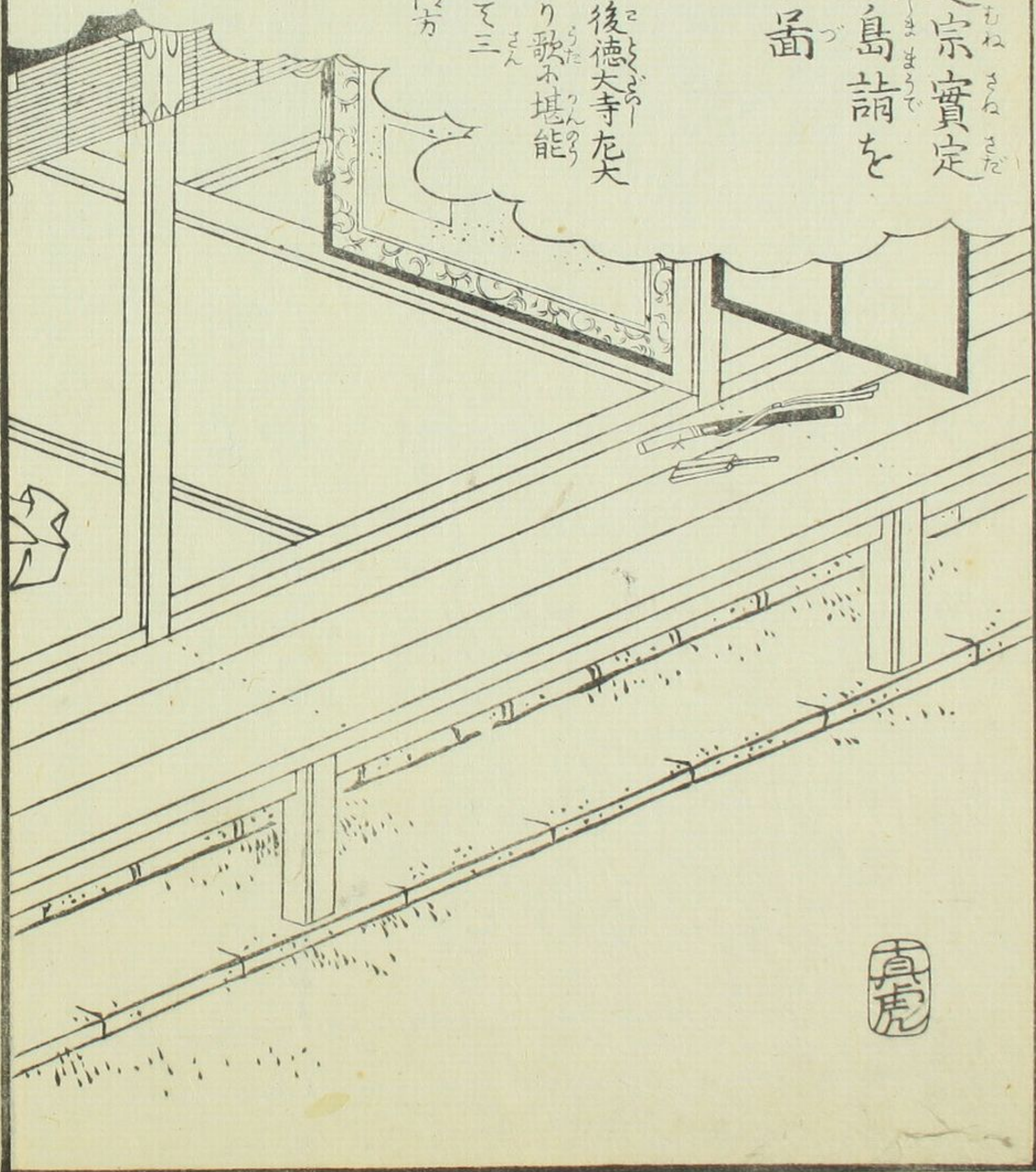
へ詣るきよ—んに中願を立ちける程小十二月廿七日つひ小左  
大将ふたつねよ々里いつく—まに宿願も頼りてをねおえける同三  
年三月晦日嚴島ふまゐるとて出らね々々大納言實國卿中納言  
實家卿などぞをなひ侍るこに自中法門九府も系りたまひた  
祭々々三條大入道そに大納言なり六條の左政大臣に  
中將まで侍りけるもねを—けるとなひやさけり此度けりや  
中將に此島の宝前して太平樂乃曲舞まはせたるね—けり案  
けるりなり

○源平盛衰記曰徳大寺に實定へ大将宗盛を裁らねて大納言  
致辭し申さねて山家の栖小籠居たりり中畧 清身ちうくつ  
ひたまひる侍小佐後兵衛尉近宗と云者あり事小觸てはり  
—記者なり々々礼を何事も阻なくうちとけ作合さけりるに近宗



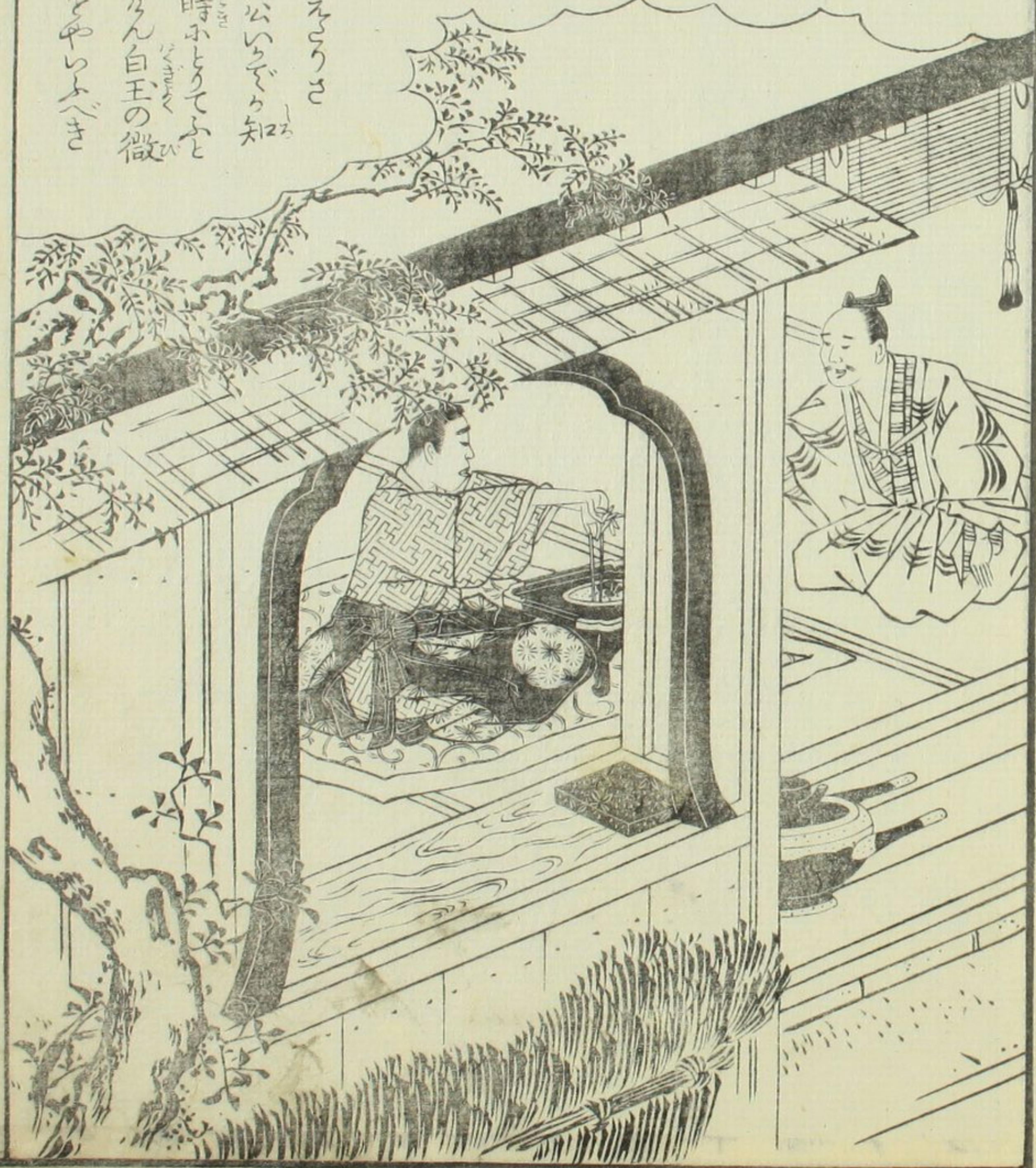
佐藤近宗實定  
 御小巖島詣を  
 さくむる笛

實定公とい後徳大寺大  
 臣の清なり歌不堪能  
 小松りまして三  
 槐尊位のは方  
 今の當時この  
 公おちまひ  
 たまふたれい  
 さりた  
 志れど  
 もせ時の



貞虎

酒を母名と  
 んえまへま  
 や名もな  
 如酒とよ  
 みたまひ  
 一く名  
 なるの大  
 おとい異  
 名をつら  
 れるひ  
 よ一老明の  
 無名抄よこそ  
 むかりのひ公いさ  
 しめさらん時ふと  
 思さへるらん白王の微  
 瑕といかさをやいふべき





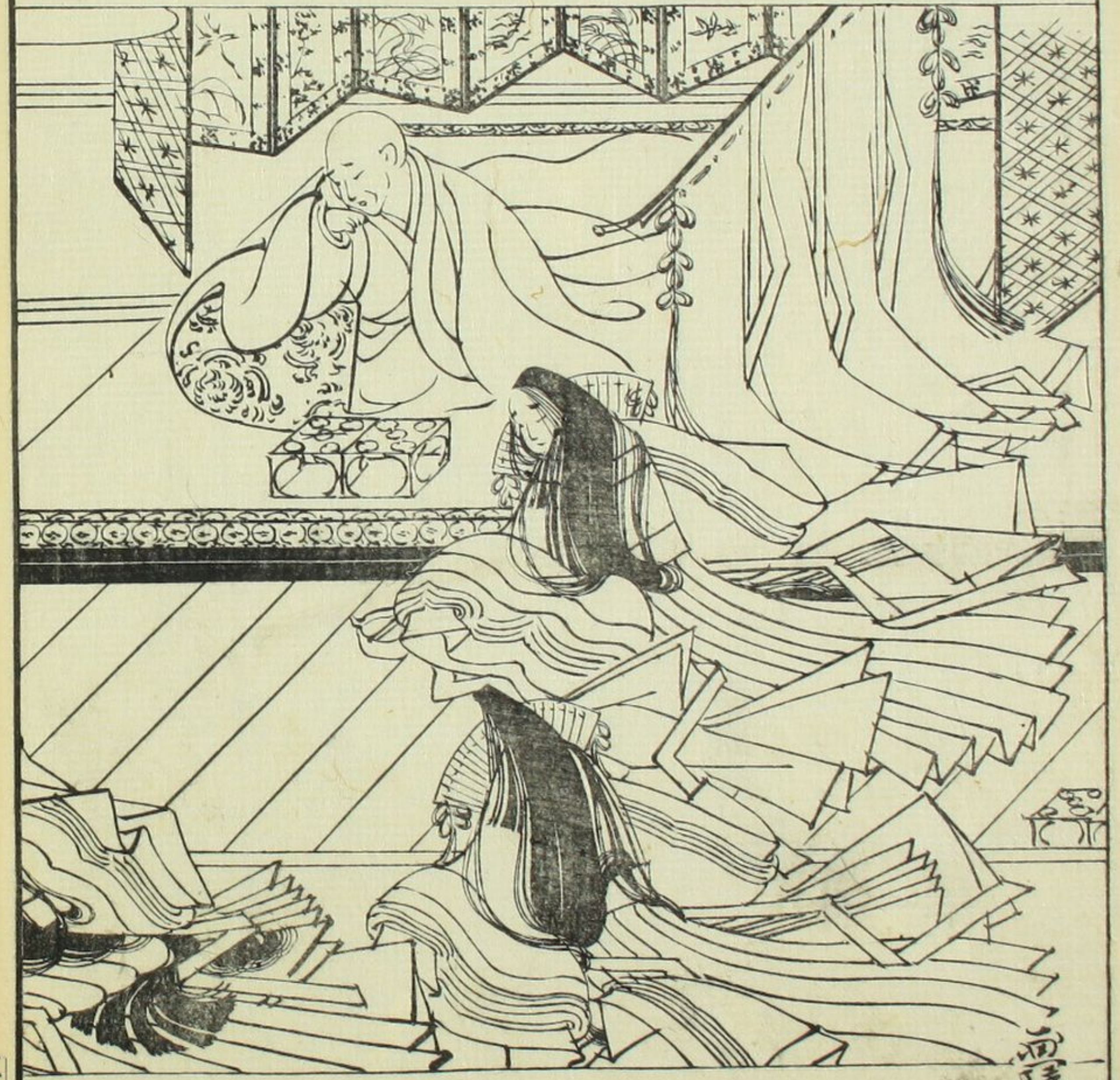
我は宣ひたるハ平家ハ桓武帝の後胤トハ名乗まど母無下ハ振舞  
くたして僅小下國受領我ニ持任せしハ忠盛始テ家我興ハ昇殿  
をゆるはき一子孫ナリ當家ハ開院始祖大政大臣仁義公ヨリ已来  
君小仕へ奉り代々既小大將を爲さるハマ宗盛小越らきて世小論  
をん身此爲家我ニ免人の嘲を招くべハ是を出家をせむや  
と思召ゆ？ 何るべきと作けるに近宗申けるハ涉出家までハ何る  
べら次 中畧 今ハ何のにもして入道の心を取せ給て一日ナリ共大將又涉  
名我係させ給べき御計ニ持大切なきそれ小取て安穩にいつハ  
へ涉糸情ありて穂小出で此子我祈申させ給べハ此明神をハ平  
家深く崇たてまつりて其の社小内侍といふ者我居られたりかの内侍  
ども毎年一度ハ上洛して入道見参小入ると承まハか涉涉子  
ニ持とりしらなど語中せば明神の御計もありまた入道もいち

トる如人にて思直はるも何りなんとトけまハ近宗ははるゝハ然  
るべしとてやがて涉精進何りて嚴島へまゐり終ふ日二月二日いつ  
一はま着終ふ神前小まゐりて社頭の景糸我持一たまハ皓潔  
たる波月の和光の影を誦ひ蒼茫たる水雲ハ利物の風を帯たり  
雲の楣霞の軒いくばくハ年へむ玉此簾錦の帳たのみを爲て  
日我むけり遠國小も眺望やはき名取とて神明地を點一跡をた  
ま人を利したまふニ持たせけし肩我さ一袖をつらぬる内侍も結縁  
うやましく涉説をまば信をいし一歩我まゝ願望もを免たのも  
しく持おぢ一免ハ涉糸籠ハ七箇日ナリ其間内侍とも常小ま  
ありて今様朗詠一琴琵琶彈など一々旅の涉つきハま々惜何  
る體ニ慰免奉る 中畧 七日過ぬまば都一歸りおぢたまふ内侍とも一夜  
の泊まで涉供申て其夜の殊小餘波我惜ニ奉り明ぬまハ暇申ける我



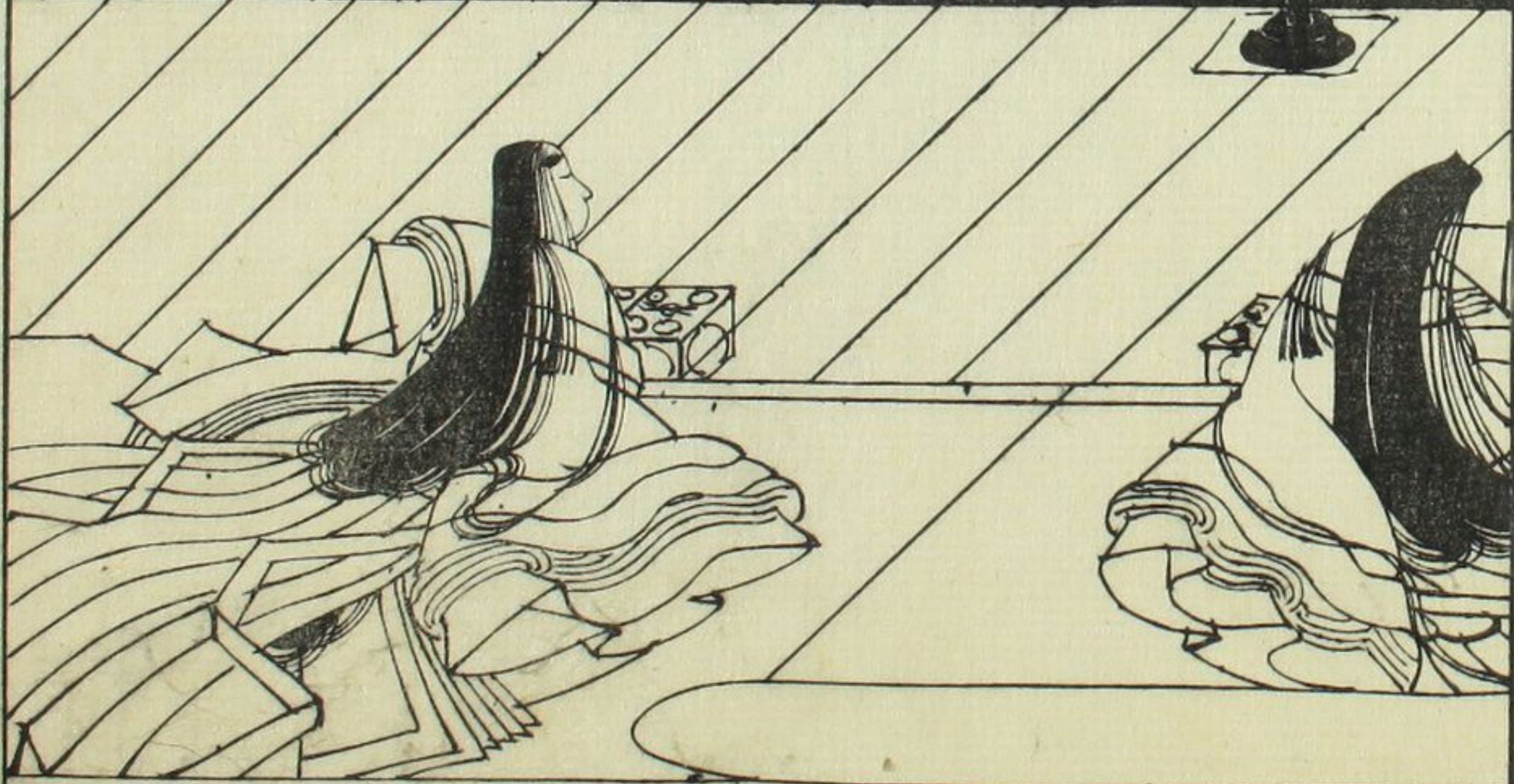
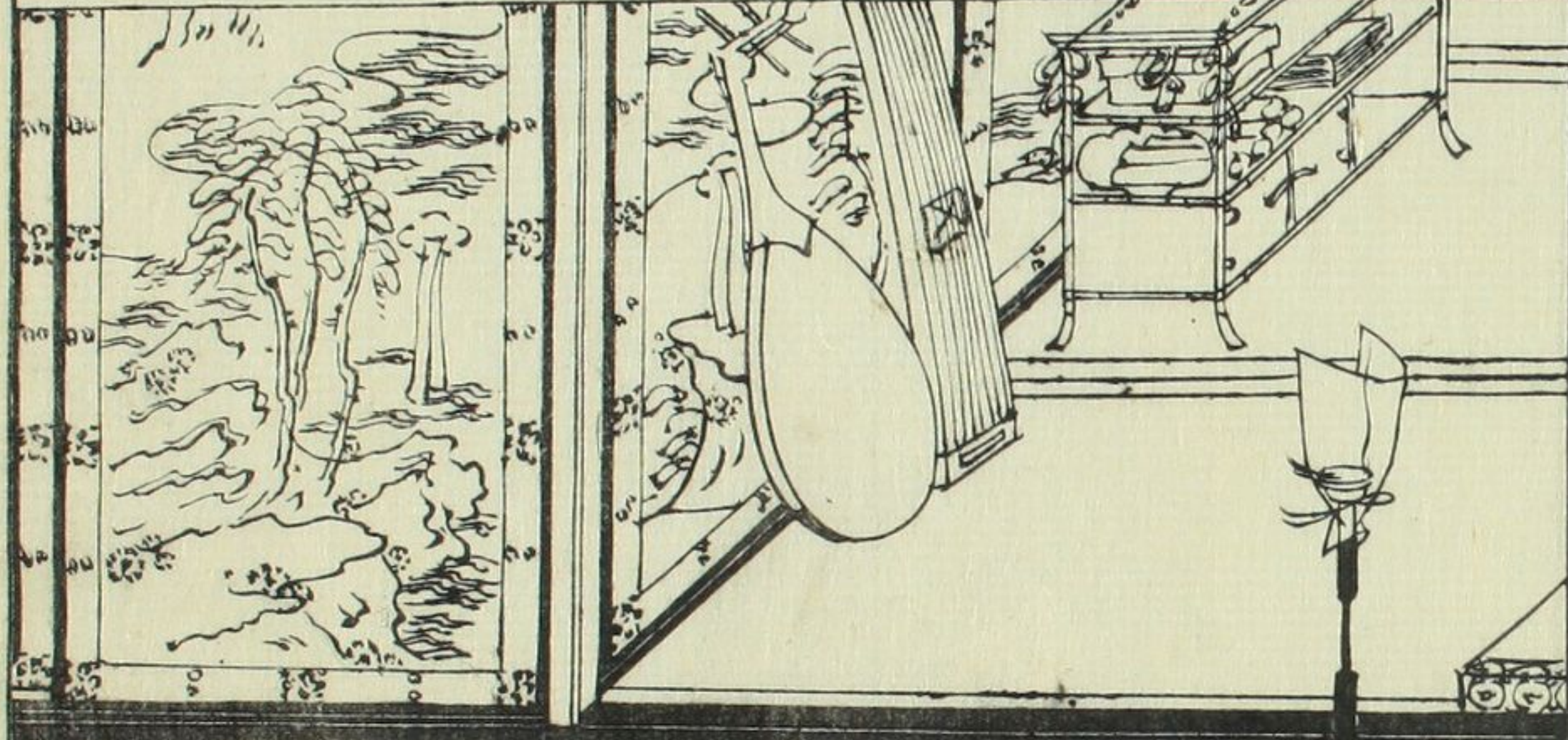
西八條殿  
 内侍  
 清盛公不  
 對面の圖

世の画工乃公  
 を面くた  
 行杯の迹よ  
 りまことの面  
 同を知さる  
 が故に眼とい  
 うしは顔は  
 なく一肥左り  
 なる顔み  
 なる顔み



河津生可  
 画

つらてこく  
 画りとい  
 たくませの  
 ように載の  
 一人の人た  
 肖たると  
 ると細は  
 ん然あれ  
 この像た  
 るに画巻  
 によつて  
 ものなれ  
 うーとい  
 る人々  
 今人以  
 髪不相  
 是別人  
 ことを  
 みのん  
 ばさむ  
 ばや



河津生可  
 画







いつはまらあらん見ん人  
そけよたよーたご

○山槐記曰治承三年六月七日前大相國院山令詣安執伊都岐  
島給自一昨日御措進但魚味不憚也丹波守行雅侍從兼經藏人  
大夫恭房判官信口民部大夫政清監物康識左衛門尉信直右馬  
允高清令著結衣給云々出彼經供養并内侍巫也等給物料也  
卅石可忤替仍欲泰内之處右少弁光雅令史示遂四口無申旨者  
仍延引泰内云々廿二日令還向給云々

鹿苑院殿嚴島詣記

源貞世作

尤此おちいまうちぎみいつくはまうでたことわり中畧むう母嚴  
島まの高倉院涉幸なり平此おちいまうち君もたびくまうで  
らま一例も侍々めと母こおとびひきりつくゑづら一地涉姿ど  
もめて花田色小目結とやりふも人を深て袖口ちそく裾ひ

ろ紀うちらけとつちもおをねな一次がとに着たまひ赤地おひ  
小青色地脛巾赤色地とら地袴なり涉供の人々みまとさ  
紀をぬりなる金がとなどもけせらる康應元年三月四日夜ふ  
ろく都をひでさせ給ふ地日の午の時はりに裾津の金兵  
庫の津小つつ勢たまひ勢涉座地舟小系るべき人くうねては  
だめらる

修理大夫

右京大夫

日野弁

畠山允近大夫將監

同七郎

今川修理亮

志下

古山十郎

こけちりのおのくの舟めてまあり侍り

畠山清門佐

山名播磨守



細川澄路守

探頭伊豫入道

同右清門佐

伊勢清門入道

朝倉周幡守

古山珠阿

士佛

土岐伊豫守

今川越後入道

同中勢右輔

曾我員濃入道

若王寺別當

松壽丸

九月倭寇の風尾さといふとその後のもうにららる侍系は  
ち北島などいふ浦くわふありて是申こ社まといひしころ  
籠城へくらり侍りと地とあり侍りしなりと祭こ社南小伊豫  
の三島はらににたり今夜の安藝の風高崎といふ海べた  
小舟船をうけらる十日またこ社おさせたまふ三津風早やま

地内の海神代日長久礼畑見の海川の迫つら屋う北浦くは  
させたまへりねんど乃迫つといふ瀧の如く潮をやく狭地と  
こ強なり船ともか一落されいと手もたゆくこくあり  
ふなまはぬとも取あへる落つ早地は瀬を流きあがる哉  
豊崎などか一次ぐる程おまた夜お入て子北時をかりよいつく  
一海小着を給ふ侍社のう一強小黒本北侍旅取をつくはり今  
夜の舟北まにとほりたる人も多るべし十一日侍社か一強  
がませ給て侍前の漢北も居北をとりよ祭かごふて侍船小  
うつらと給つり侍社の廊へ拜殿などに巫内侍やう北神司  
女と母たちここたりかも来北むらかき居たるにいとよく似たり緒  
方とり屋いふのわたり北川とて安藝と周防の比ら北川乃  
ま急の海づつこて周防の風けうち北室積などいふまらわり



足申屋代の島伊豫北國そ前此山など南小ありてかきみ  
つ波のうへもうちりたり夜船へるはもとなる船

とて神代より海上小舟ありたり 下畧

○源貞世今川了俊 道行より長月廿日つくし海はまらうで侍る此

島の峯三にむかり替ひえつらりて深山木此年ふりたるうちにまじ  
架て老たる松の岩此うへ小生かふきつ磯際までまがりたりかの  
清社の屋うへもこ一戌亥小むくひたり廊此下まで潮をち入たりも  
居る海の中小たたり島の四方小入江と母もまたありて見起るなり  
侍るなり百浦侍るとぞまうはあそれん家もて此あさりて此れと架  
つおとふとち足侍るまうはとまづ都此友も故のねやもこひく侍  
るな弥山瀧本などいふ此浦な母日とまぬべいとくはか  
しげよはくをくれにむくむなり此はてはうり侍りて清此をま

こ紀いで佛舍利東大寺 兼室 海小入たてまつりぬけ度の祈なるべし夕日小む

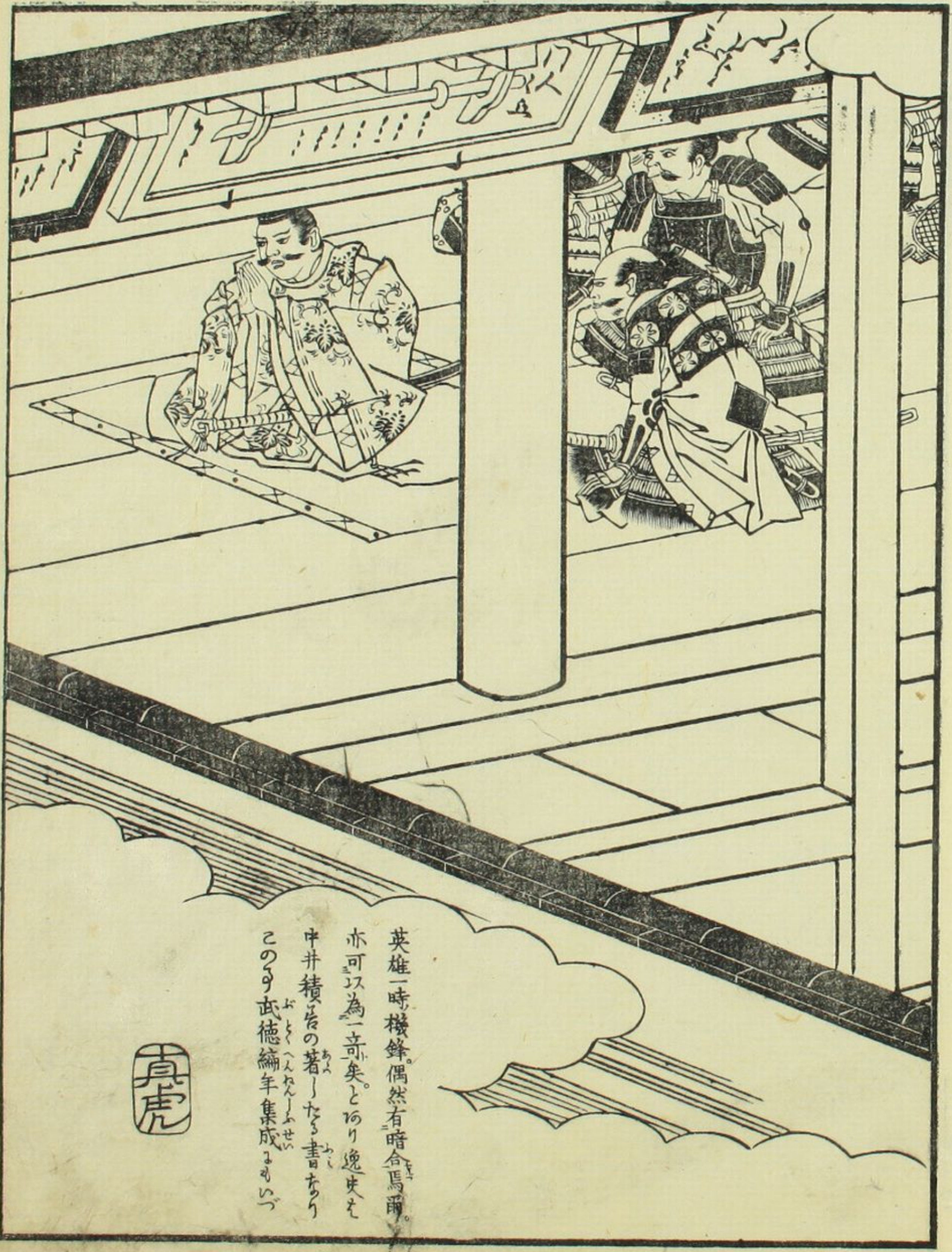
らひてこ紀もこむむとひくし侍り向て船おそく侍るの磯際いそぎのぬるみ  
かけて侍りしなど船子ども此ゆか紙などてかくはふぞとたづね侍り  
しうばかやうに潮のみちひの早起時とたの磯際いそぎの潮のはらさまに流侍る  
どに船ふねのこ紀よく侍るなりぬるみとまよど此申次といふ

いそ際のぬるみゆけて出舟ふねをやくし侍るちむくむなほ

け浦このによも方やま小山くちかさなりていつく潮のみちひも通せんととねおゆる  
海中小こ紀島も侍るなりたり誠小海うみの都みやこ此あるど此侍るまおとねおえ  
てこ紀世の中よとも見え侍るなりつりてまはまきはでねおえ 下畧

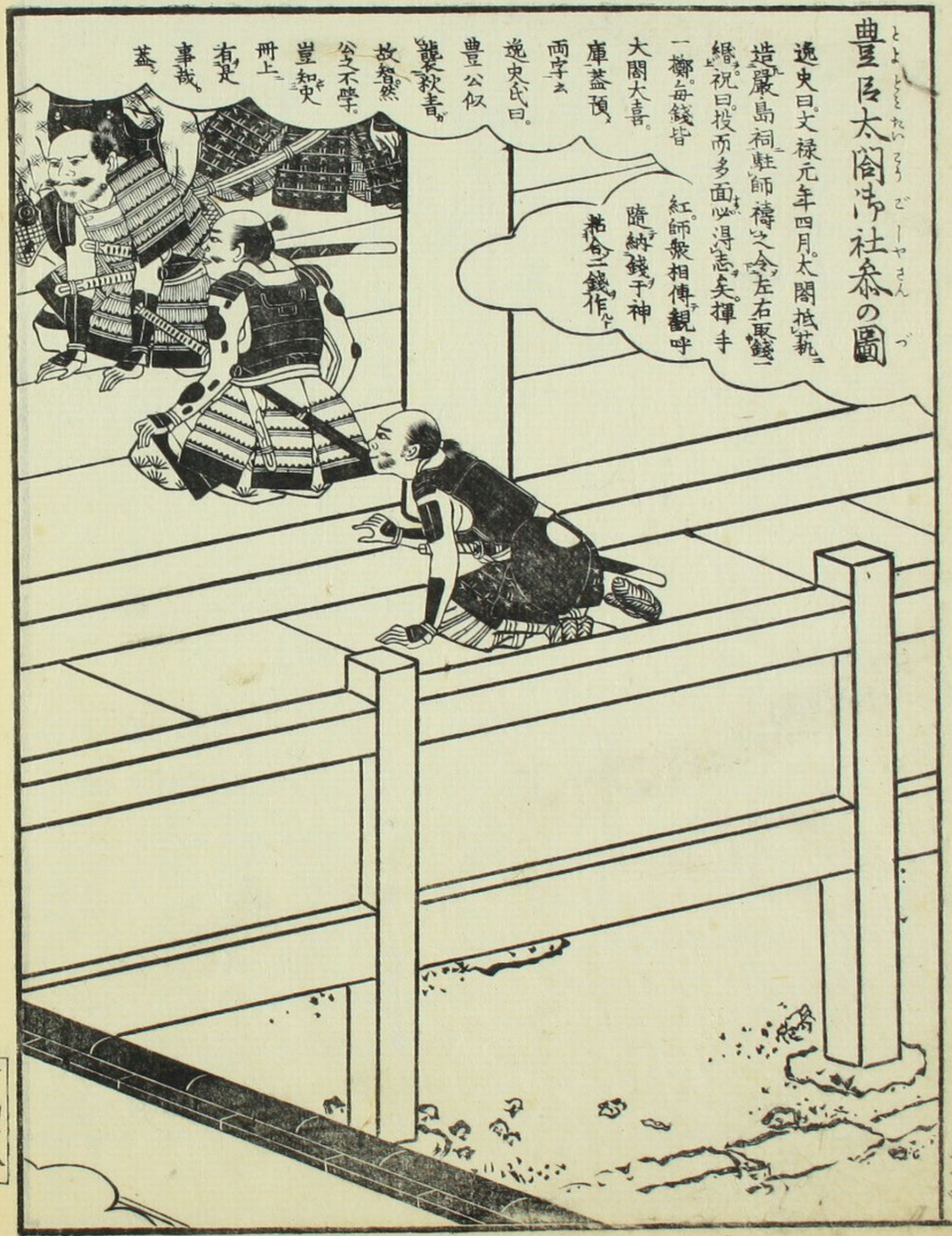
○豊鑑曰秀吉公中園経て名護屋小おとむきたまふ安藤あきの廣島ひろしまの  
毛利住もり不ななれ一日二日をほひたまふ近々ちかれをいつくし海へ請まごたまふ清社  
は小むくひ海を望み廻廊くわいりやう舞殿まひだんなど潮干うしほがこ此白沙しらを作りぬる





英雄一時機鋒。偶然有暗合焉。爾亦可以為一奇矣。と有り逸史を中井積信の著したる書ありこのり武徳編年集成より

真虎



豊臣太閤清社参の圖

逸史曰。文祿元年四月。太閤抵執造嚴島祠。駐師禱之。令左右取錢一擲。每錢皆大閤大喜。庫蓋預。西字云。逸史氏曰。豐公似。雙秋音。故智然。公之不學。豈知史。冊上。有是。事哉。蓋。

紅師衆相傳。觀呼。隨納錢于神。若合三錢作。







牙小こむね軒端の山の何きう智小從つる若れさ紙麻の声

月前舟

修理右夫實時

空る一はや浪踏もるか小月をてはそく舟人よは漕くなり

杜紅葉

前関自家一條

うつりゆくるしの森の梅まぞーごころちどれ色い見えける

夜時雨

津守國助

しほゆたひとまぢれやなうで月夜もゆるよはの山風

浦子鳥

大藏卿

むらむらたよよ来れなみり月夜むらに浦子鳥なり

雪中松

九馬頭定成

しほきて嵐もけをぢれ邊の松乃うちるはゆりゆゆ

山路嵐

少納言季長

梅が香却やちの末吹かふるあじや花のさなうちる

旅泊夢

沙弥明覚

ちくちくぬ浪のうたぬとまり船着路するに都をぞ見る

寄衣意

左近衛少将隆教

うたねなうつはのちもれかさへたての津衣子

寄玉堂

侍従為守

軒端よりこわく西路のくももしはあふあまる色やゆん

寄書意

玄輝門院少将

およといねたよもかち一葉の葉は風のつてなるつゆの玉つこ

寄舟意

新院新大納言

松まは渚小よほる泉郎小舟みる采もかきて漕くはとや

寄貝意

右近衛中将親平



西行法師めろちきさうの名地旧跡を歴遊して  
 此島へも来り月をこく詠哥の感あはれ  
 慨あり——こと山家集に見えり  
 哥ハ本文よのそ



うたへたはよふ波のうつせ貝んこけなちやうらみむ

浦鶴

散位親範

ふくこち浦の月此あはばの松風さむくたつも啼たり

磯鷗

寂忍法師

なまは江やいもの松をこゑて海さたのかみ来波よなご

夕迹懐

右近将将為實

理あるうむなり月日たをれて夕こといもれかゆん

曉懐旧

右近将監政秋

はてもこれむういりもこそれねと痛覚をかちや限る

壽量品

沙門釋覺

せ来てなちたむきより此つらう城はとりてはる念なりり

普門品

藤原仲光女







りて丹小なり侍まひ立出てゆく侍まで見よよ汝干しおみち眼のま  
へ小ありて汀三町をかりも我ち方小なりぬきつしおいた大海の  
いづれ哉と宗祇賢伝なりこそちりちりちり那 下累

こま丹三日いづれ海まで  
さ次しお母光をそへて高の名此官居まきし紀まはる月 似や法沙  
同夜まこ殿の百八燈をたぎりたてまつりて

とと強うたつの家居もろががと足きてつちなる浪の息火 日  
屋もろろのひらもたき官はの神小何申も城もろがも強人 中納言持豊

たつこと業

僧海量

かけまく母あ屋おかそく言巻もろな小好しは伊都伎しま  
菜汁しづまりいま次なる安藤の海いづれ海の大官此よるひを  
母しづ波のちりちり淡辺ちりちりや弟のちぢみひららら

よ一たつ岩根に官柱おと一はたて高天原小千本たたく瑞の  
大といら神さびたてりねおん湯舟のうてなひろく免ぐりほそ殿  
長くつちなり堅小横おたろ橋うちはしつけそ一右よ左小  
石植玉がたひきままどりかたここちたう山ひくきゆつたうど  
乃こそばあし残る隈なく大床の下までうしち此満来るは  
ま世おたぐひなく免でつべ一月のけ燈のひうり波おうつろ  
ひ空小かよひんのちり母拂ひつべいづれ世の世のちり人の  
免ではし免らんみちのく此松島たよはのそ此後なる天の橋  
立こ此いづきしまれを世おひでなる名ろそ一はとこ強ちり  
と人ごとと言強かろつて免り然いあなれとまが皇國のひろき  
かきもかきぬ名ろそ一は處と山のたろ河の大野のひ  
ろき原のふき島のころちり谷の八十隈免ぐらちり巖此







乃下までうーわの満来るよやひまことに世ふたぐひなき  
名は一紀と後なりと并でもやまじまよこせうよ  
しつゝ

宮柱ふとくたてるぶたは汐のふちる島そこは島  
ついで神の宮もいぢなむらもいぢまのわが神瑞籬  
みづ紀ふもちる汐ふとも一火はけがうつはるまゝ紀ふふ  
朝ふらん見まど母あは次神風のつまはひよほる浪  
安藤のうみつき一は根の動なくはらもえゆなぐあは

安藤のつくまふて

とーはいたく大海のいつてう那  
ねわ海のまの細江や朝がはみ  
宗長  
紹巴

みつゝかに月よりう一乃宮居う那  
亀はう一乃をまらかそ免るれまづは糸  
満ゝねにうややゝ糸花の屋ま  
なまや月うげうひりういづく一は

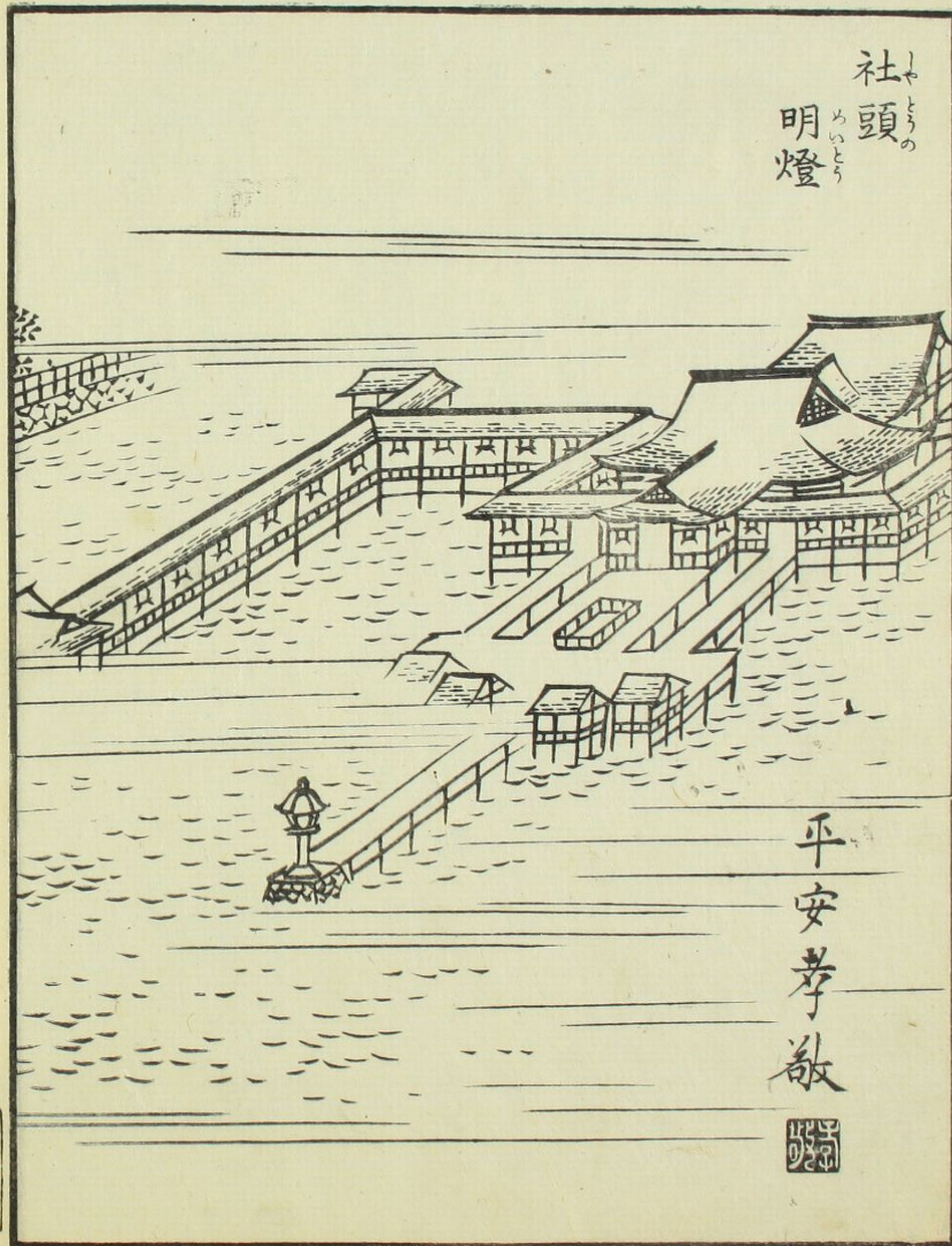
此余大内受隆の菟島舟向とわ連歌あり  
陸徳太平記の載たりそにの畧は

宮ははや燈籠の火にあけををし  
燈籠やいつくは屋弟なみの花  
み屋島屋廻廊ふ夜のちまやれま  
松の雪うみも彩るやいつく一ま  
とーにたついつく一ま根のよつ乃麻  
梅が香や眠く次一ろ一宥直祢宜  
王が恵方おわ一まア海いつく島  
其角  
美濃  
伊勢  
涼菟  
洛  
重瀬  
難波  
野坡  
海  
園更





あはれ  
たがい  
づの  
あま  
うけぢ  
先て  
先えき  
こやの  
さゆ  
田田清



社頭  
明燈

平安孝敬









燈光映波却疑星斗落欄干。  
鴉定鶴棲欽夕陽。紅燈百八點。長廊。夜潮推  
迸萬波色。天女介來無盡光。

僧獨麟

嚴島圖會卷之終



